

昼食の頻度別に見た、困ったときの相談先（子ども票 問7×子ども票 問22）

※「あなたは、いやなことや悩んでいることがあるとき、だれかに相談しますか。（だれに話しますか。）」
 に対し、以下のようにまとめた。

家族・親戚に相談：「親」「きょうだい」「おばあちゃん・おじいちゃん」「おじ・おばなど親戚」

「いところ」のいずれか少なくとも1つを回答した人

ともだちに相談：「学校のともだち」「塾や習い事のともだち」「その他のともだち」

先生に相談する：「担任の先生や他のクラスの先生」「保健室の先生」「クラブ活動や部活の先生」

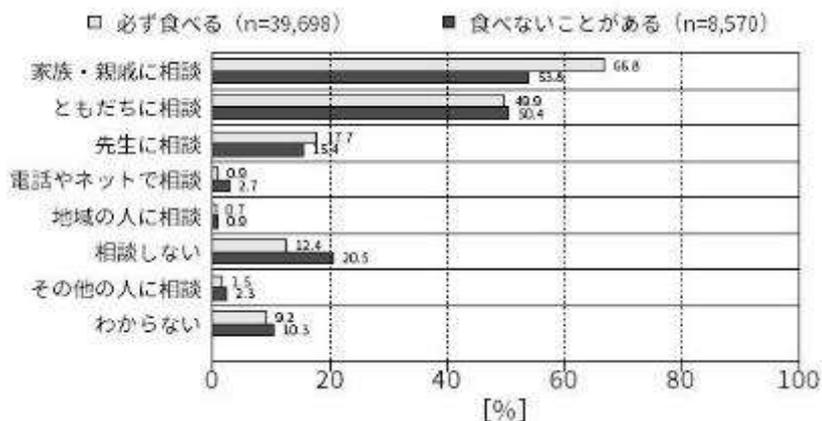
「スクールカウンセラー」「塾や習いごとの先生」「学童保育、児童いきいき放課後事業の先生」

電話やネットで相談する群：「子ども専用の電話相談」「インターネットやサイトを通じて知り合った
 直接会ったことのない人」

地域の人に相談する群：「近所の人」「地域の支援団体」

相談しない群：「だれにも相談できない」「だれにも相談したくない」

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

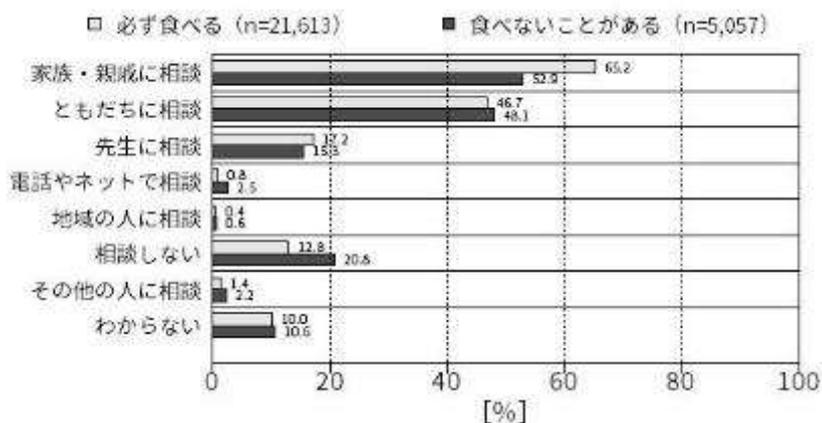


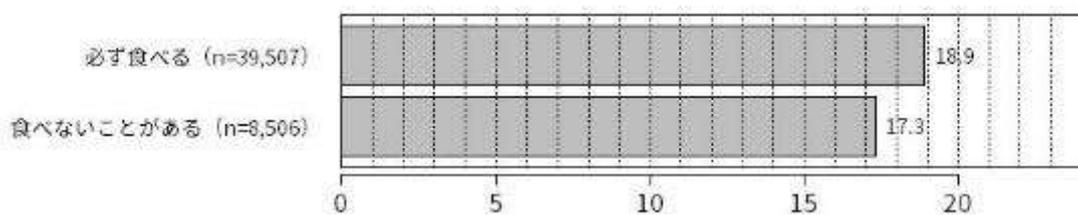
図 189. 昼食の頻度別に見た、困ったときの相談先

「相談しない」に着目すると、昼食を「食べないことがある」方が、「相談しない」と答えた割合が20.8%と、昼食を必ず食べる方よりも高かった。

昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー（子ども票 問7×子ども票 問26 (1)～(6)）

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図148上の説明参照。

<大阪府内全自治体>



<大阪市24区>

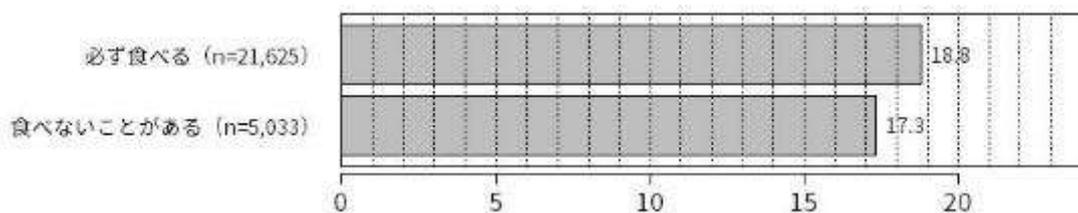
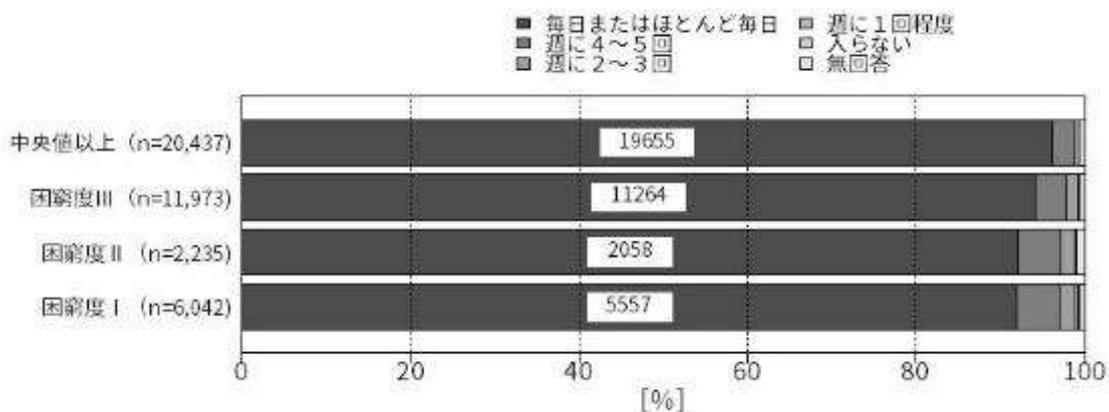


図190. 昼食の頻度別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

休日の昼食の頻度別に子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）の得点を見ると、「必ず食べる」と回答した人の得点が18.8点であるのに対して、「食べないことがある」と回答した人は17.3点と昼食を「必ず食べる」と回答した人のほうが、子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高い結果となった。

困窮度別に見た、入浴頻度（子ども票 問8）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

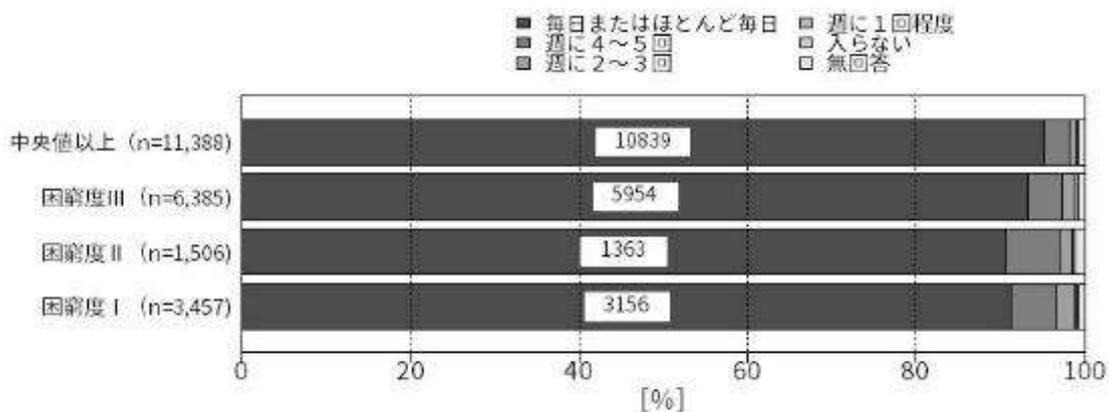
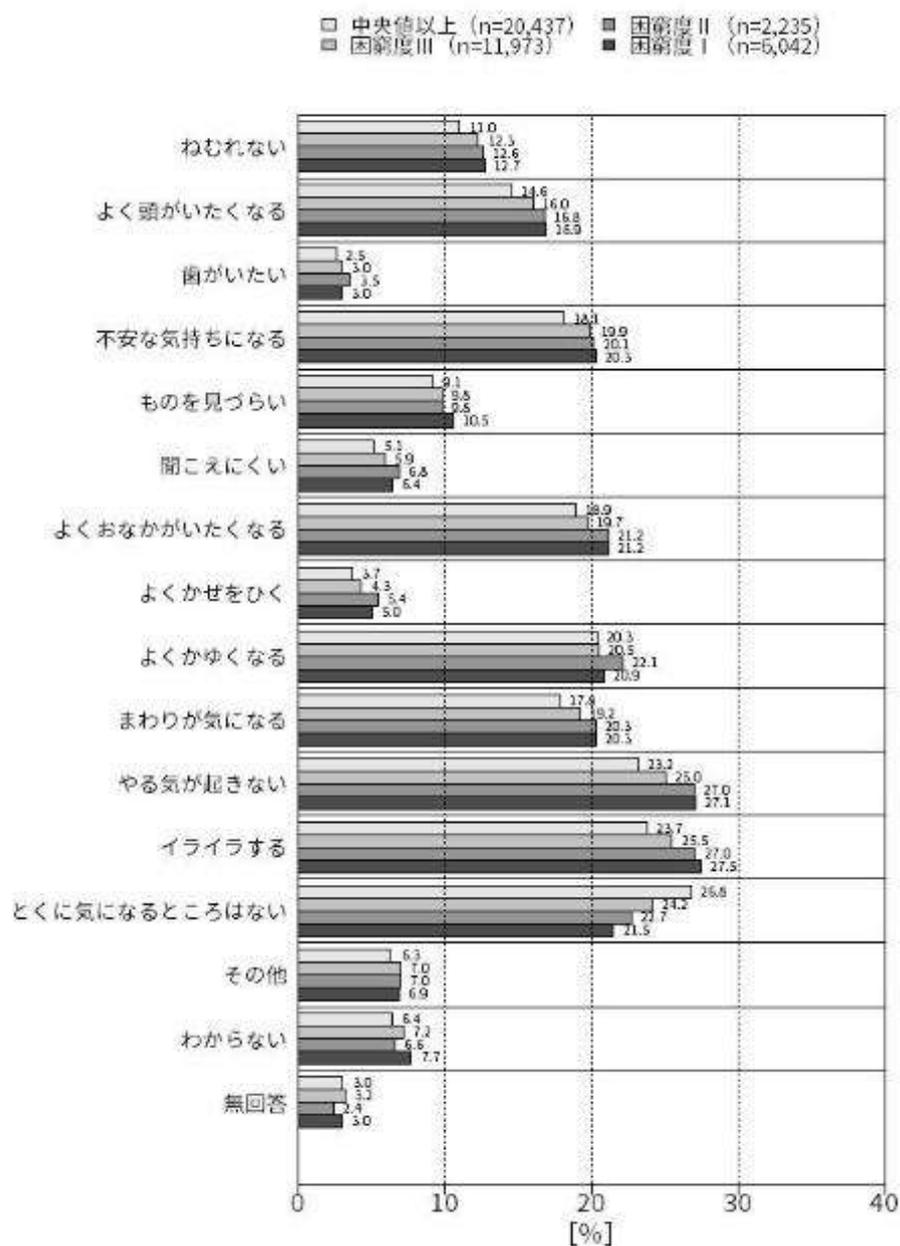


図 191. 困窮度別に見た、入浴頻度

困窮度別に入浴頻度を見ると、困窮度が高まるにつれ、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合がやや低くなっており、困窮度Ⅰ群では91.3%であった。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（子ども票 問24）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

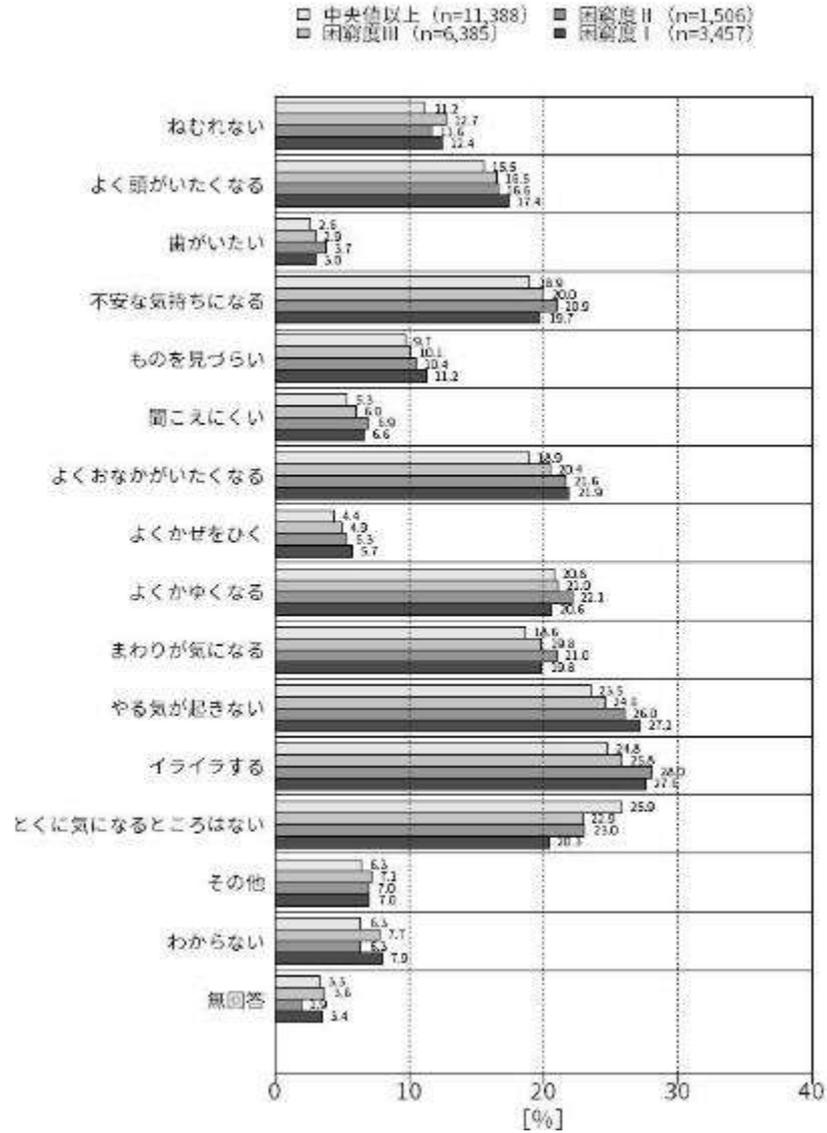
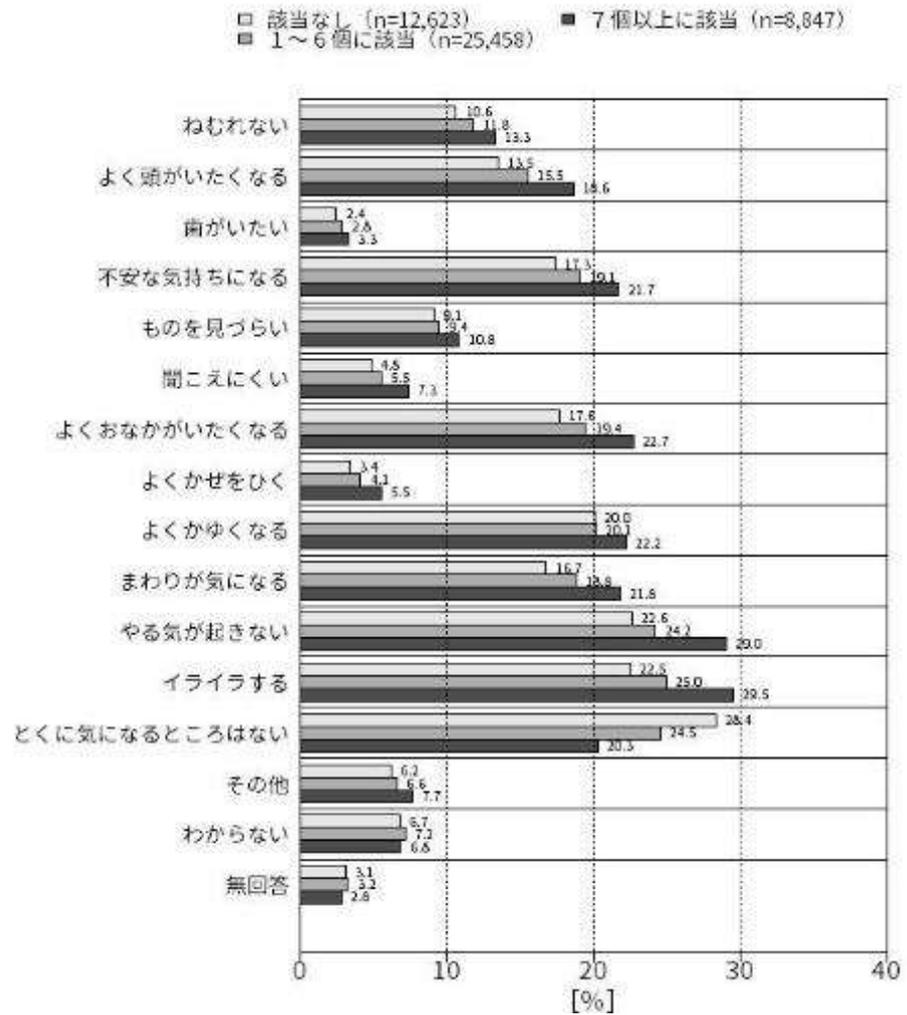


図 192. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になることを、中央値以上群と困窮度Ⅰ群間で差が大きい項目に着目すると、特に高い項目は見られなかった。しかし、中央値以上群と比べ、困窮度Ⅰ群では、「やる気が起きない」27.2%（中央値以上群に対し、1.2倍）、「イライラする」27.6%（1.2倍）など、心理的・精神的症状を示す項目での割合の高さも無視できない。

経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者票
問7 ×子ども票 問24）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

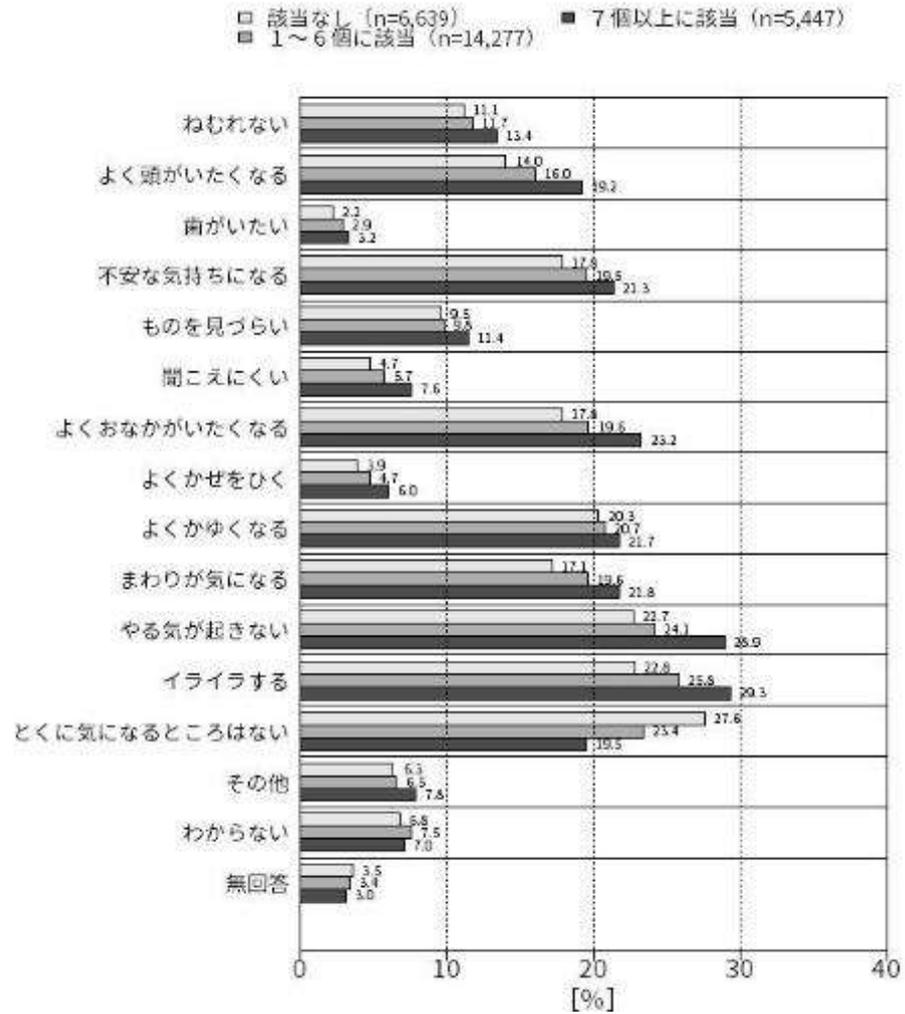
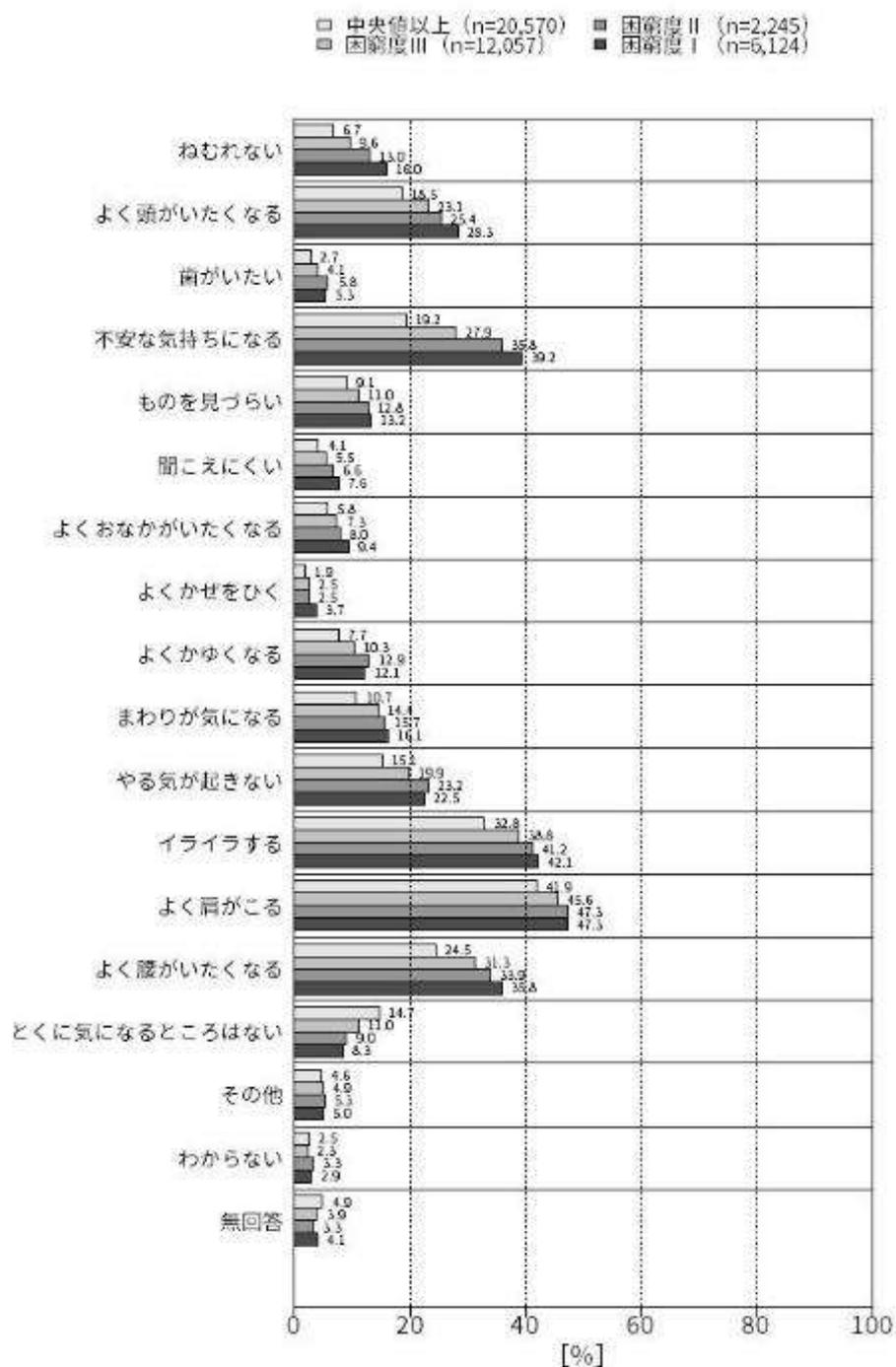


図 193. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目しながら、「7個以上該当」群の数値を挙げると、「聞こえにくい」7.6%（「該当なし」に対し1.6倍）、「よくかぜをひく」6%（1.5倍）、「歯がいたい」3.2%（1.5倍）となっている。

困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者票 問26）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

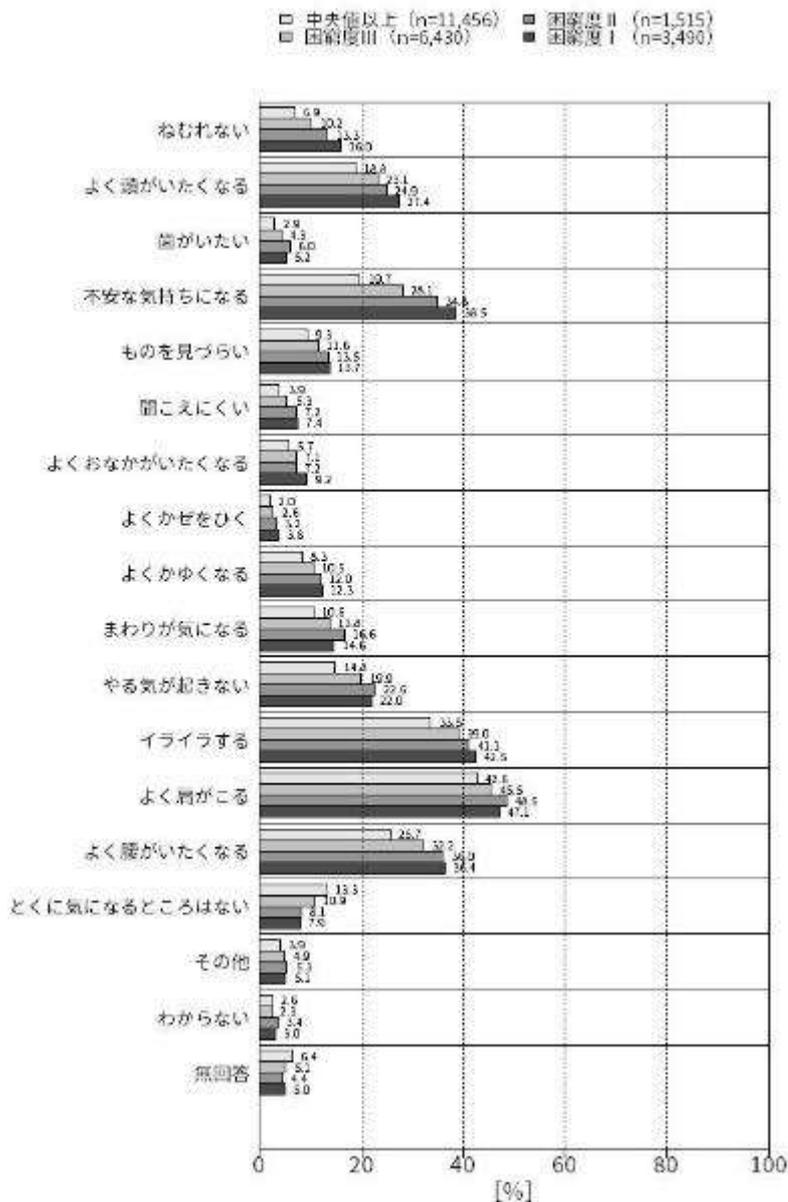
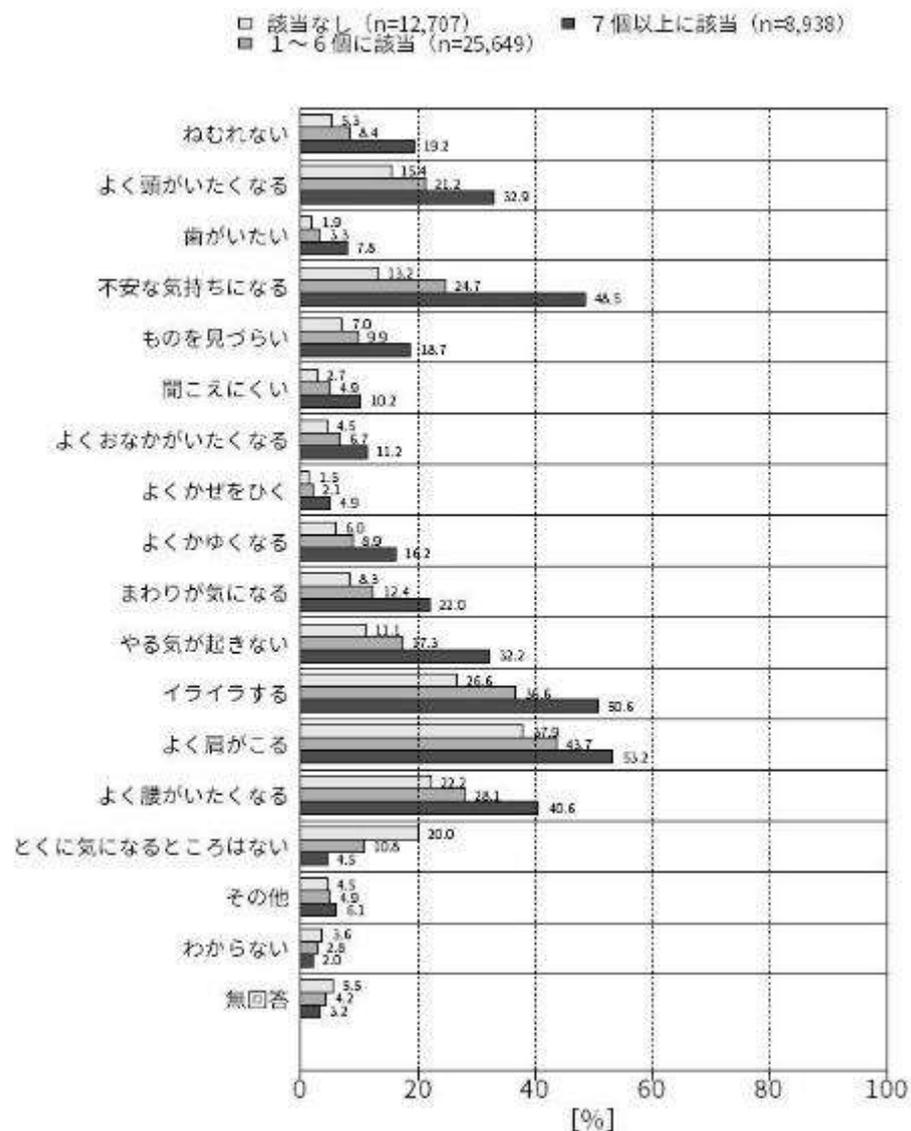


図 194. 困窮度別に見た、自分の体や気持ちで気になること

困窮度別に自分の体や気持ちで気になること（保護者）を見ると、多くの項目において、困窮度が高まるにつれ、自分の体や気持ちで気になることのそれぞれの項目が高くなっている。特に困窮度 I 群に着目して、中央値以上群との差が大きい順に挙げると、「ねむれない」16%（中央値以上群に対して、2.3 倍）、「不安な気持ちになる」38.5%（2.0 倍）、「よくかぜをひく」3.8%（1.9 倍）となっている。つづいて、「聞こえにくい」7.4%（1.9 倍）、「歯がいたい」5.2%（1.8 倍）にも差がみられた。

経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること（保護者票
問7 ×保護者票 問26）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

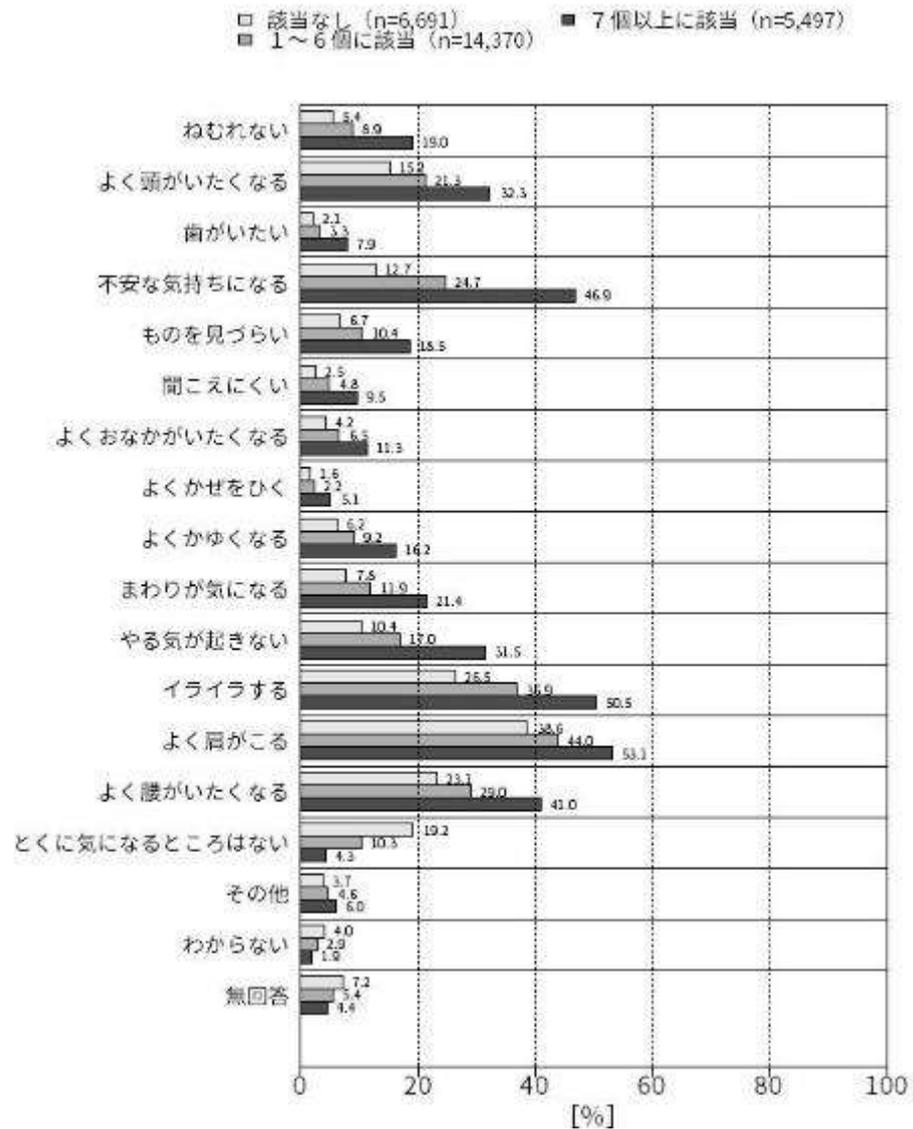
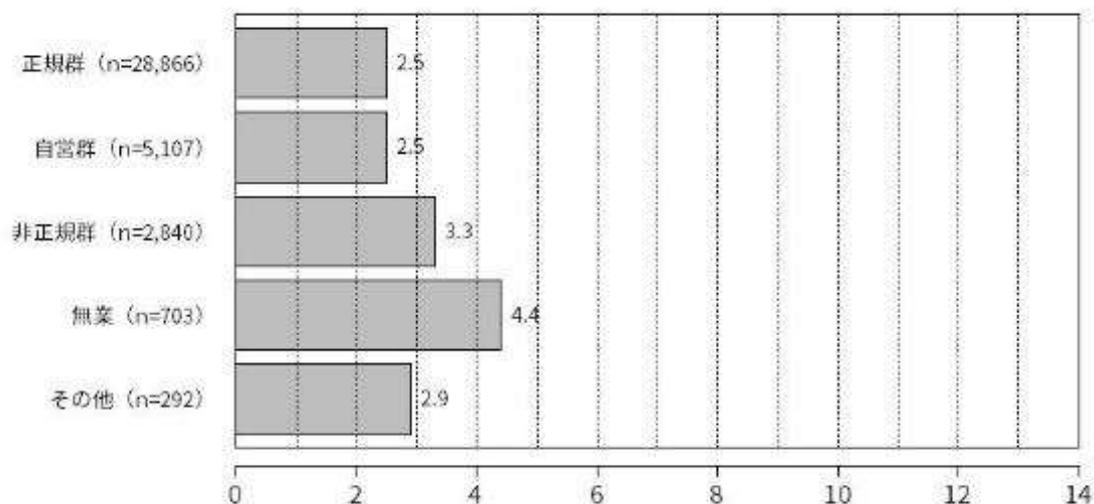


図 195. 経済的な理由による経験該当数別に見た、自分の体や気持ちで気になること

経済的な理由による経験の該当数別に自分の体や気持ちで気になることを見ると、「該当なし」と「7個以上に該当」と回答した人との差が大きい項目に着目しながら、「7個以上該当」群の数値を挙げると、「聞こえにくい」9.5%（「該当なし」に対し3.8倍）、「歯がいたい」7.9%（3.8倍）、「不安な気持ちになる」46.9%（3.7倍）となっている。さらに、「該当なし」と上記の項目ほどの差はないものの、「7個以上に該当」と回答した人では、「イライラする」50.5%（1.9倍）、「やる気が起きない」31.5%（3.0倍）など、ここでも心理的・精神的状況を示す項目での割合の高さが示された。

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

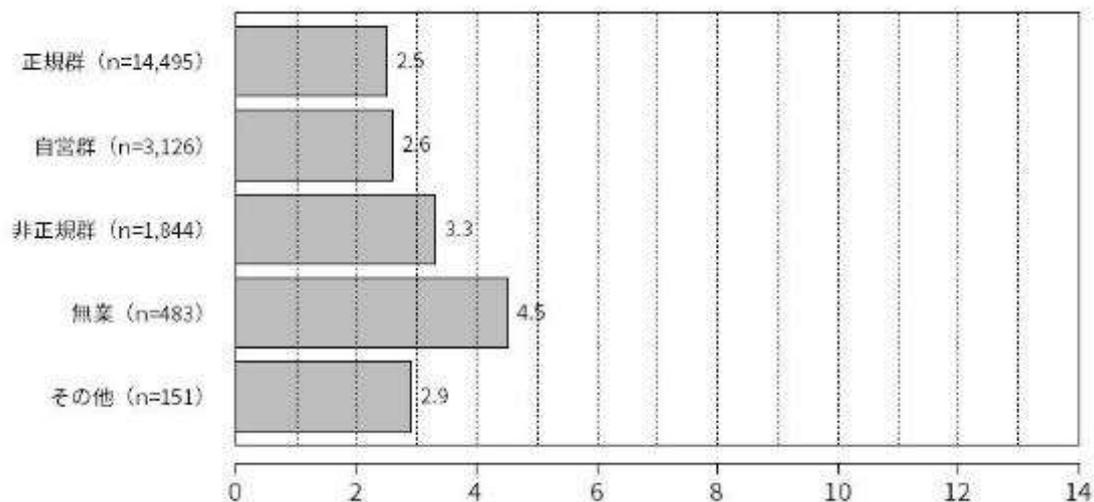


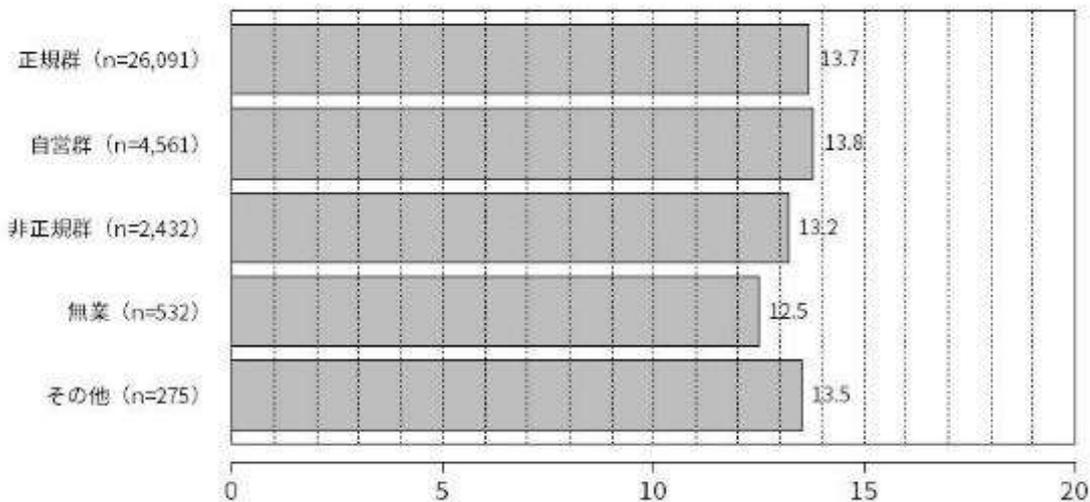
図 196. 就労状況別に見た、自分の体や気持ちで気になることの該当数

就労状況別に自分の体や気持ちで気になることの該当数を見ると、「正規群」、「自営業」に対して、「非正規群」、「無業」、「その他」群において、自分の体や気持ちで気になることの該当数が多い結果となった。

就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー（保護者票 問29 ①～⑤）

※成田・下仲・中里他（1995）の特性的自己効力感尺度より「自分が立てた目標や計画はうまくできる自信がある」、「はじめはうまくいかない事でも、できるまでやり続ける」、「人の集まりの中では、うまくふるまえない」、「私は自分から友達を作るのがうまい」、「人生で起きる問題の多くは自分では解決できない」の5項目を抽出して使用した。それぞれの項目について、「そう思う」～「思わない」までの4段階で評価させ、5項目の合計得点を大人のセルフ・エフィカシー得点とした。得点が高いほど、自己効力感（セルフ・エフィカシー）が高いことを表す。

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

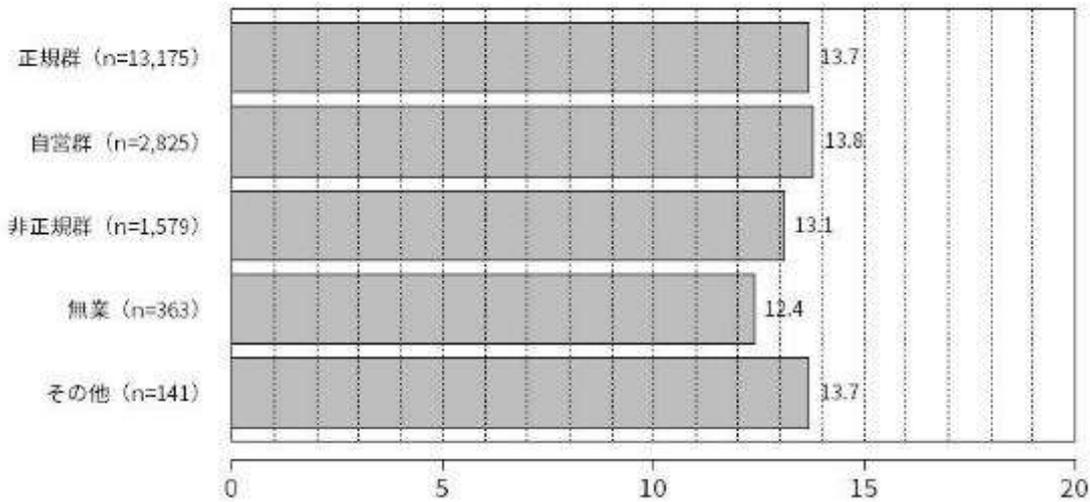


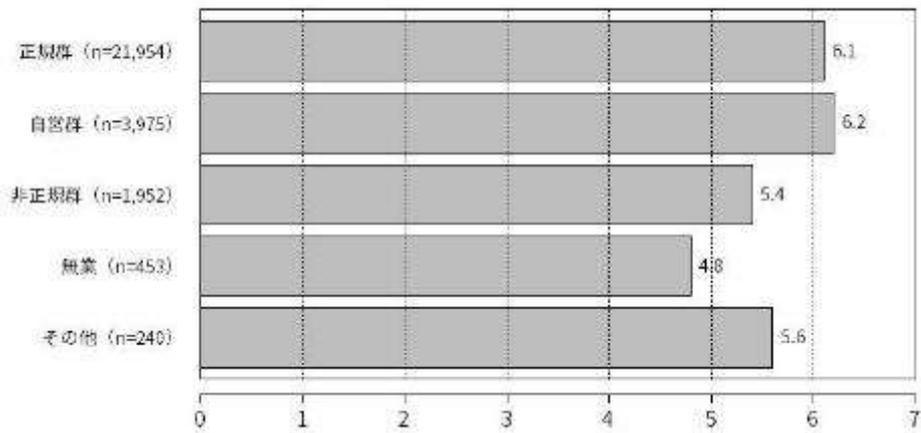
図 197. 就労状況別に見た、保護者のセルフ・エフィカシー

就労状況別に保護者の自己効力感（セルフ・エフィカシー）を見ると、非正規群においては 13.1 点、無業群において 12.4 点と、やや低くなっている。

就労状況別に見た、支えてくれる人得点（保護者票 問23 ①～⑦）

※「あなたを支え、手伝ってくれる人はいですか」という質問について、「心配ごとや悩みごとを親身になって聞いてくれる人」「あなたの気持ちを察して思いやってくれる人」「趣味や興味のあることを一緒に話して、気分転換させてくれる人」「子どもとの関わりについて、適切な助言をしてくれる人」「子どもの学びや遊びを豊かにする情報を教えてくれる人（運動や文化活動）」「子どもの体調が悪いとき、医療機関に連れて行ってくれる人」「留守を頼める人」の7項目を提示した。それぞれの人物が「いる」か「いない」かで評定させようとして、「いない」を0点、「いる」を1点とし、7項目の合計得点を「支えてくれる人得点」とした。得点が高いほど、身近に支えてくれる人が多く存在することを表す。

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

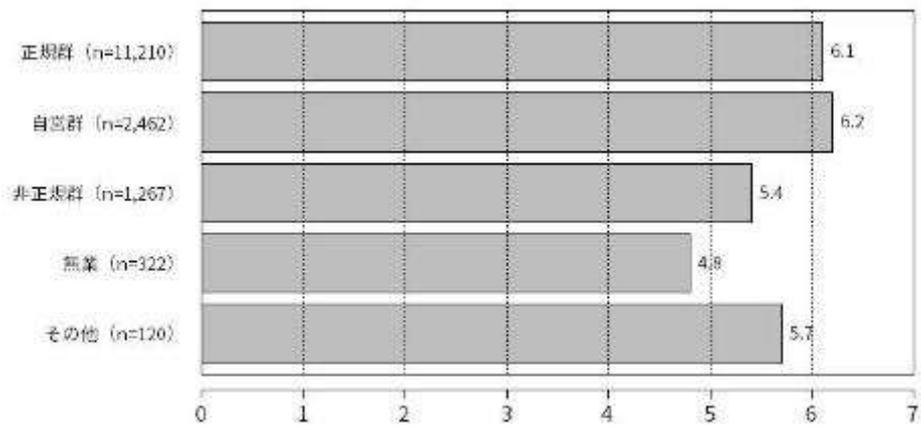
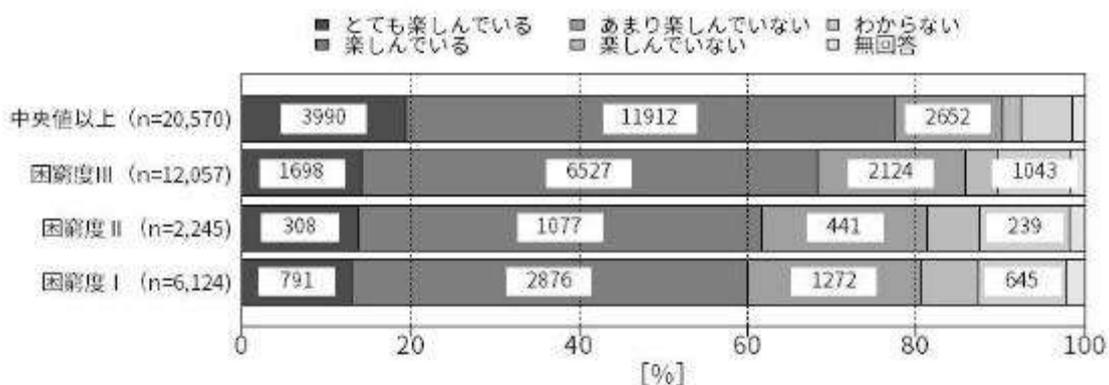


図 198. 就労状況別に見た、支えてくれる人得点

就労状況別に「支えてくれる人」の有無を得点化し、その平均値を見ると、「正規群」(6.1点)と「自営群」(6.2点)が高く、非正規群で、5.4点と低下し、「無職」で4.8点ともっとも低い結果となった。

困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）（保護者票 問 25(1)）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

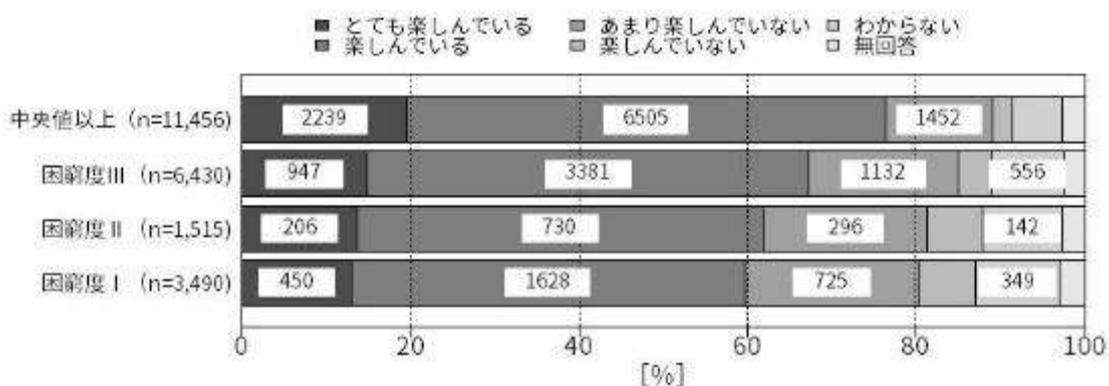
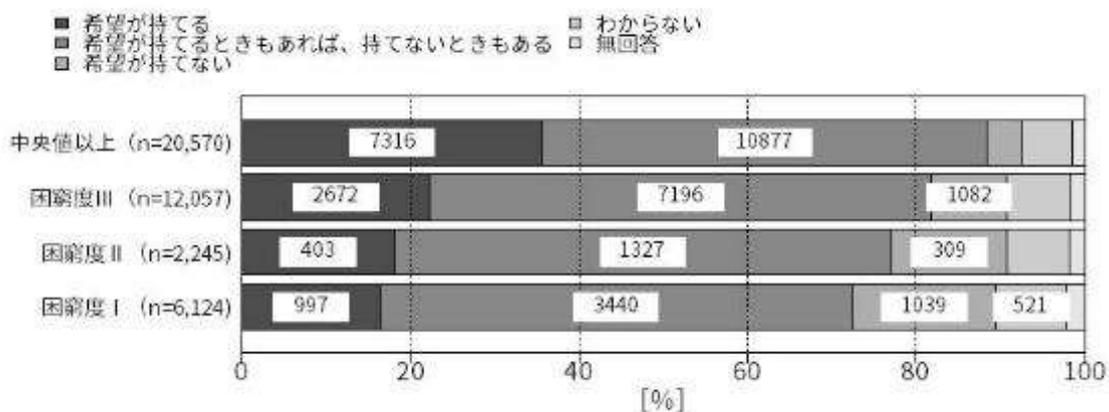


図 199. 困窮度別に見た、心の状態（生活を楽しんでいるか）

困窮度別に生活を楽しんでいるかを見ると、「とても楽しんでいる」「楽しんでいる」をあわせた割合では、中央値以上群が 76.3% ともっとも高く、困窮度が高まるにつれて低くなった。逆に、「あまり楽しんでいる」「楽しんでいる」をあわせた割合は、困窮度が高まるにつれて高くなっている。中央値以上群が 2.4%ともっとも低く、ついで、困窮度Ⅲ群で 4%、困窮度Ⅱ群で 6.6%、困窮度Ⅰ群で 6.7%となった。

困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）（保護者票 問 25(2)）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

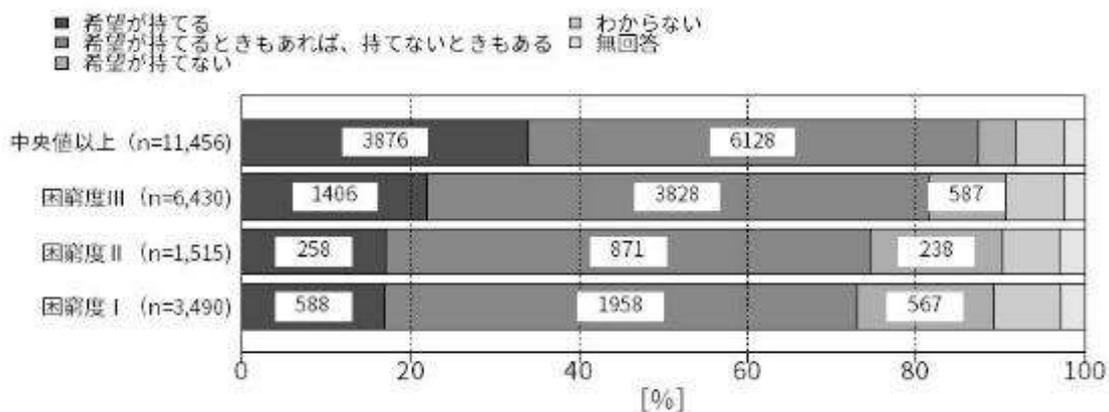
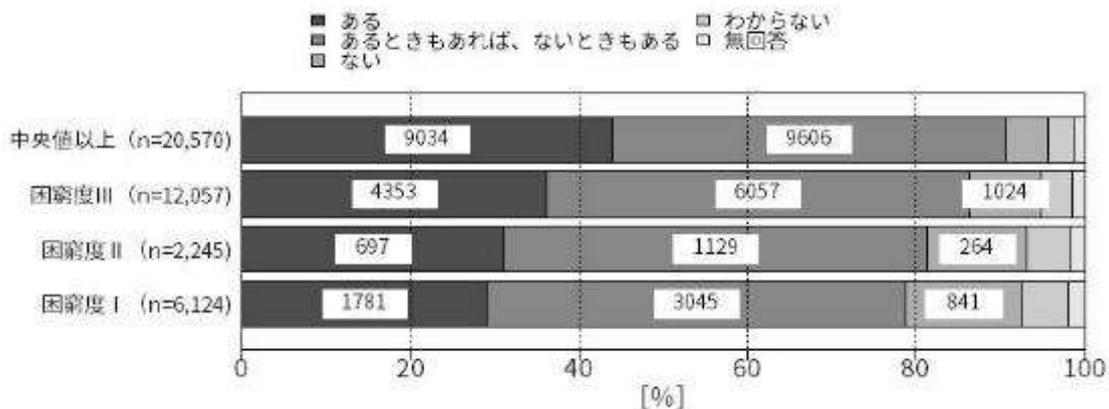


図 200. 困窮度別に見た、心の状態（将来への希望）

困窮度別に将来への希望を見ると、困窮度が高まるにつれ、「希望が持てる」と回答する割合が低くなっている。中央値以上群では、33.8%であるのに対し、困窮度Ⅲ群では21.9%、困窮度Ⅱ群では17%、困窮度Ⅰ群では、16.8%という結果となった。

困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）（保護者票 問 25(3)）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

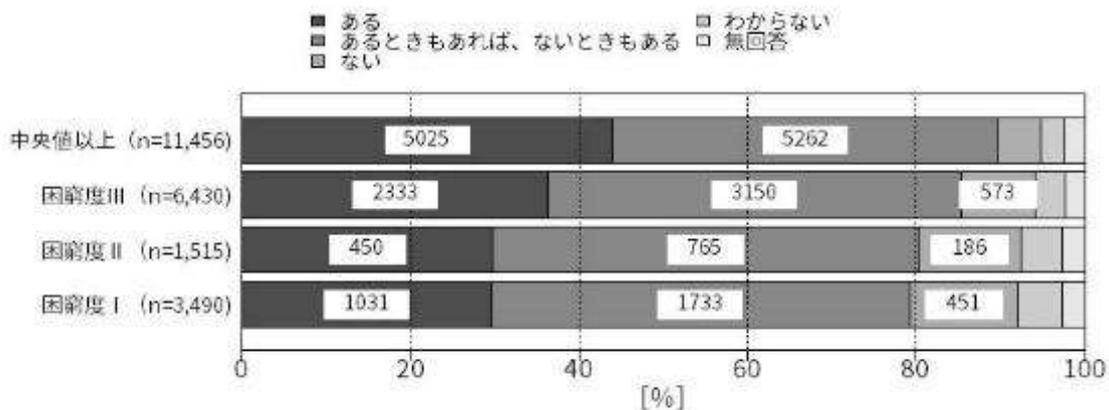
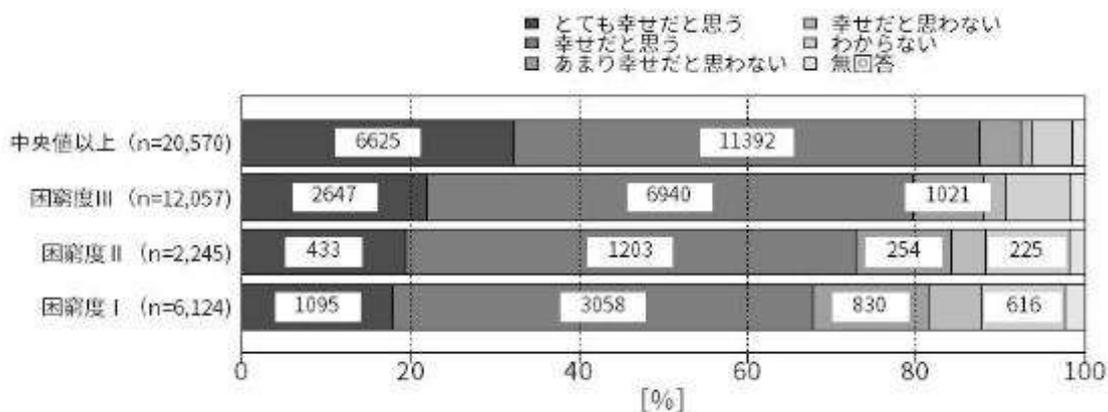


図 201. 困窮度別に見た、心の状態（ストレス発散できるもの）

困窮度別にストレスを発散できるものについて、ストレスが発散できるものが「ない」という回答に着目すると、困窮度が高まるにつれて割合が高くなっている。中央値以上群では、5.0%でもっとも低く、困窮度Ⅲ群 8.9%、困窮度Ⅱ群 12.3%、困窮度Ⅰ群 12.9%となっている。

困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）（保護者票 問 25(4)）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

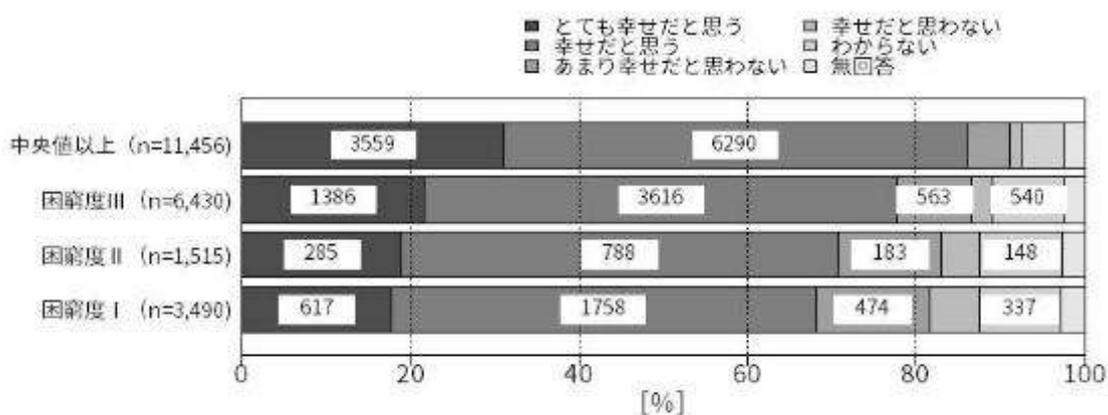
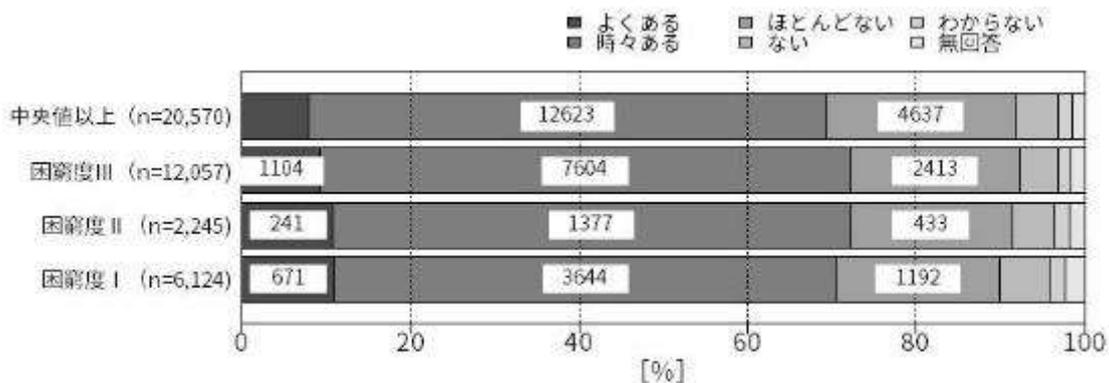


図 202. 困窮度別に見た、心の状態（幸せだと思うか）

困窮度別に幸せだと思うかを見ると、「とても幸せと思う」「幸せだと思う」をあわせた割合は、困窮度が高まるにつれて低くなる。逆に、「あまり幸せだと思わない」「幸せだと思わない」とをあわせた割合が高くなり、中央値以上群では、6.6%でもっとも低く、困窮度Ⅲ群 11.4%、困窮度Ⅱ群 16.8%、困窮度Ⅰ群 19.4%となっている。

困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと (保護者票 問 27)

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

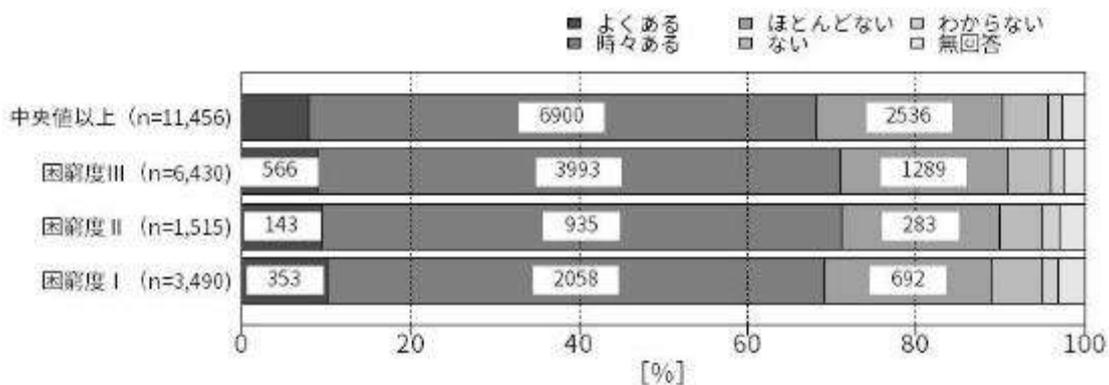
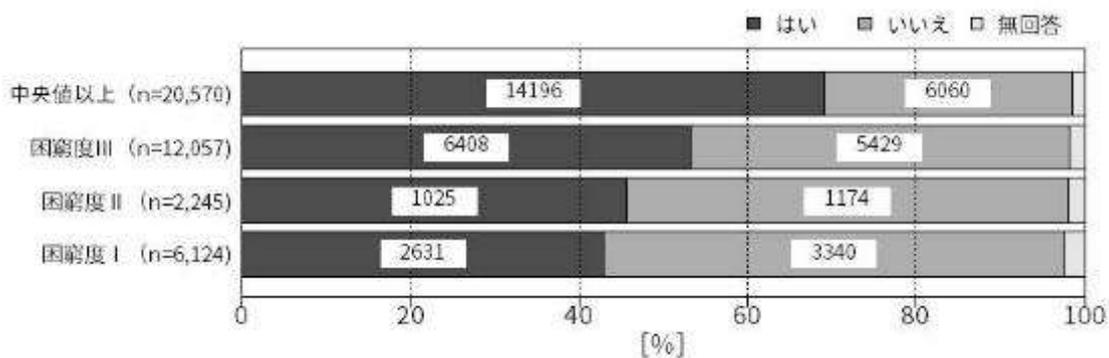


図 203. 困窮度別に見た、不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうこと

困窮度別に不安やイライラなどの感情を子どもに向けてしまうことを見ると、困窮度による大きな差は見られない。

困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診（保護者票 問 28）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

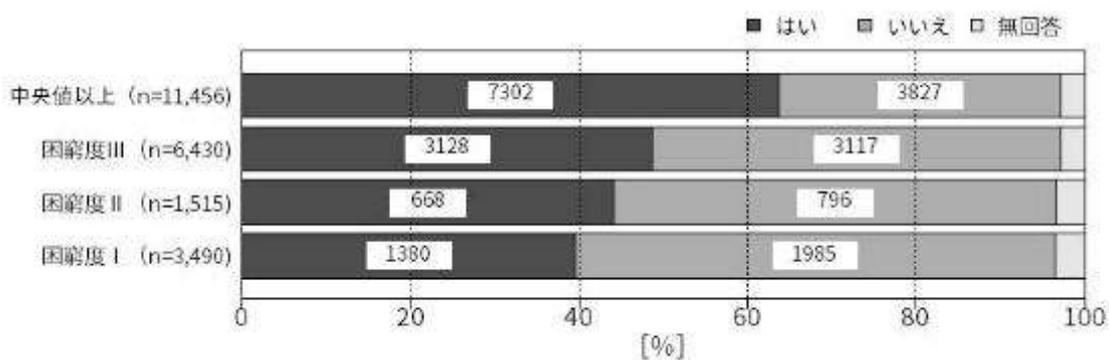
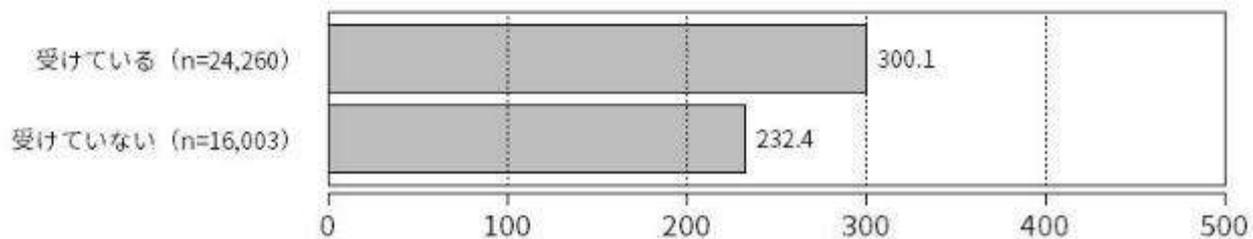


図 204. 困窮度別に見た、定期的な健康診断の受診

困窮度別に保護者の定期的な健康診断の受診を見ると、「はい」と回答した割合は中央値以上群がもっとも高く、それ以外は、低くなっている。

定期的な健康診断の受診別に見た、等価可処分所得の平均値（単位：万円）（保護者票
問 28×保護者票 問 7 ）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

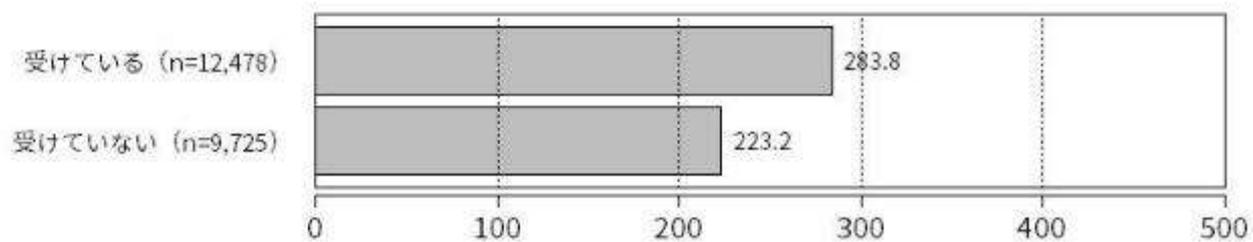


図 205. 定期的な健康診断の受診別に見た、等価可処分所得の平均値（単位：万円）

定期的な健康診断の受診別に等価の可処分所得額の平均を算出すると、「受診あり」では 283.8 万円、「受診なし」では 223.2 万円と等価可処分所得について差が見られた。

<健康に関する考察>

困窮度別に朝食の頻度をみると、困窮度が高まるにつれて、「毎日またはほとんど毎日」と回答する割合が低くなり、困窮度Ⅰ群では8割に満たず、1週間に一度も「食べない」と回答した子どもも3.6%存在している。就労状況別に朝食の頻度をみると、就労状況が不安定化するにつれて、朝食の頻度も低下している。非正規群、無業群では、ともに8割に満たなかった。「食べない」と回答した割合も、正規群の1.5%に対し、非正規群では3.8%、無業群では4.5%と高まり、朝食の頻度と困窮度および保護者の雇用環境との関連が示されている。朝食の頻度を「毎日またはほとんど毎日」と「週5回以下」に大別して、子どもを信頼しているか、よく会話をするか、を尋ねると、朝食を「毎日またはほとんど毎日」食べているほうが、「よくする」と回答した割合が「週5回以下」に比べて約10ポイント上回った。また、朝食および休日の昼食の頻度が高い人のほうが子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）がわずかではあるが高い結果が示された。

子どもの心身の自覚症状について、困窮度Ⅰ群に注目し、高い割合を示した項目を挙げると、割合が高い順に、「イライラする」（27.6%）、「やる気が起きない」（27.2%）、「よくおなかがいたくなる」（21.9%）、「まわりが気になる」（19.8%）、「不安な気持ちになる」（19.7%）、など、心理的・精神的症状の高さが特徴的である。特に、「イライラする」「やる気が起きない」という項目は、中央値以上群、困窮度Ⅲ群においても4人に1人が該当すると回答しており、困窮度が高い子どものみならず、子ども全体のこうした心理的・精神的症状が学習状況に影響を与えていることが推測される。困窮度が高まるにつれて心身の自覚症状が悪化する項目は確かにあり、「特に気になるところはない」という項目では、中央値以上群では25.9%であるのに対して、困窮度Ⅰ群では20.3%と約5ポイントの差がある。また、経済的な理由による経験該当数別にみると、該当数が多くなるにつれて、心身の自覚症状が悪化する結果となっている。困窮度が高い群の子どもに対する支援の優先度は高いものの、それだけではなく、広範な層を対象とした一般施策としての支援メニューも同時に求められている可能性が示された。

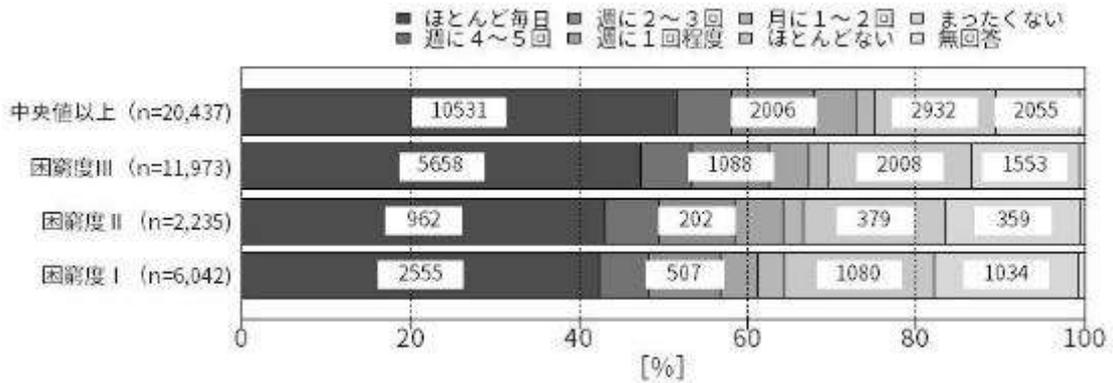
保護者の心身の症状について困窮度別にみると、中央値以上群と困窮度Ⅰ群との差が大きい項目は、「ねむれない」16.0%（中央値以上群に対して2.3倍）、「不安な気持ちになる」38.5%（1.9倍）、「聞こえにくい」7.4%（1.8倍）となっている。特に気になるところはないと回答した割合は、困窮度が高まるほど低くなり、中央値以上群13.3%に対し、困窮度Ⅰ群では7.9%と5.4ポイント差が開いている。心身の症状の該当個数を就労状況別にみると、就労状況が不安定化するにつれて、該当個数が増加する傾向が見られた。定期的な健康診断の有無について困窮度が高まるにつれて受診率が低下している。

困窮度別に生活を楽しんでいるか、将来に対する希望、ストレス発散をできるものの有無、幸福感などを尋ねると、困窮度が高まるにつれて肯定的な回答が減少している。生活困窮に起因する生活の不安感が将来への希望や幸福度に影響を与えていると推測される。

3-4. 家庭生活・学習

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）（子ども票問 10①）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

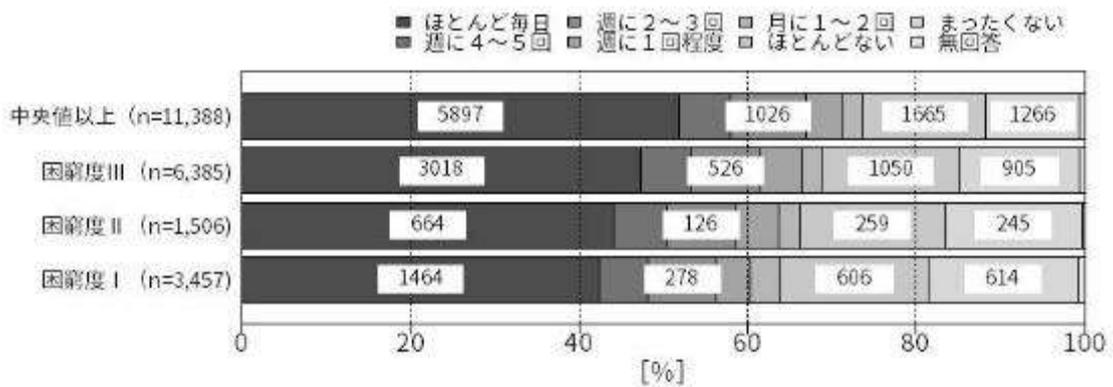
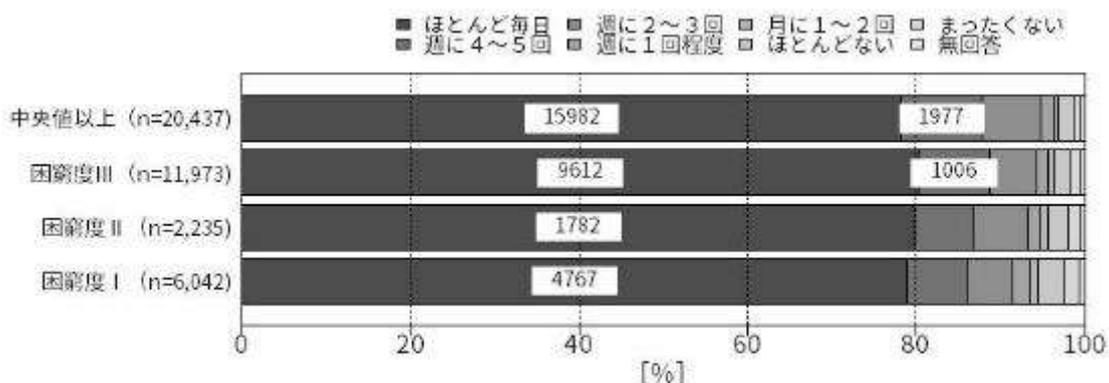


図 206. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と朝食を食べるか）を見ると、困窮度が高まるにつれ、「ほとんど毎日」と回答した割合は低くなり、「まったくない」と回答した人の割合が高くなる。困窮度Ⅰ群では、「まったくない」が17.8%、「ほとんどない」が17.5%である。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）（子ども票問 10②）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

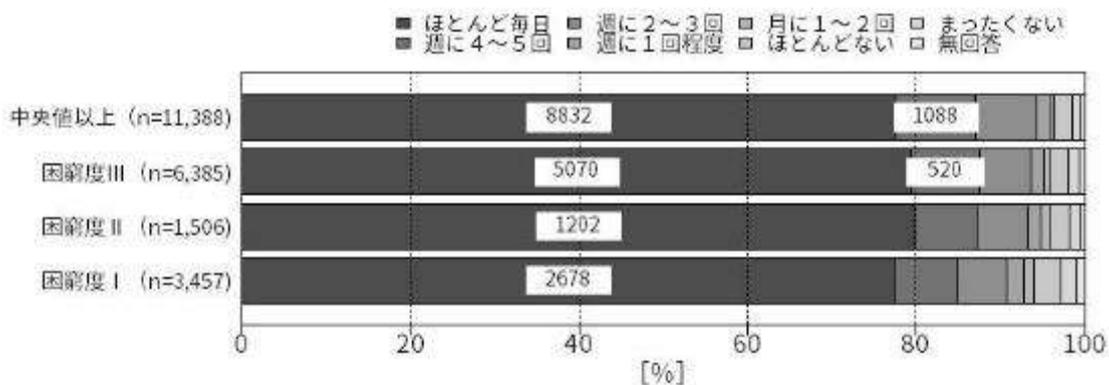
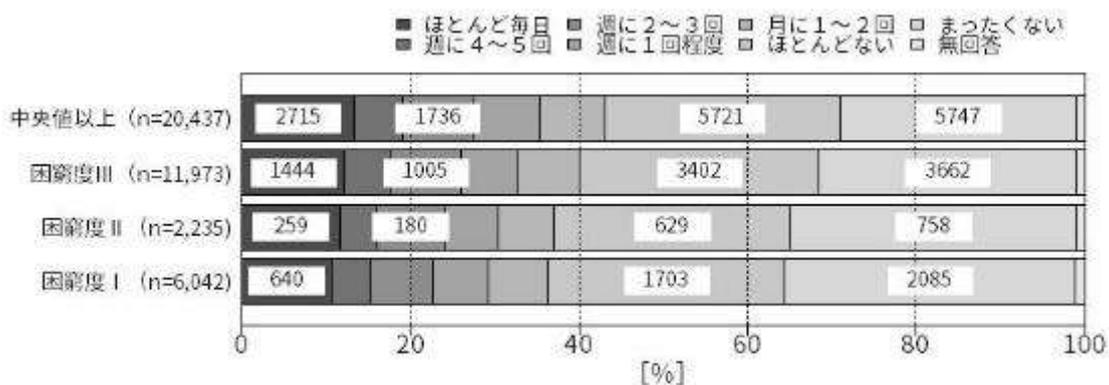


図 207. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と夕食を食べるか）を見ると、困窮度が高まるにつれ、「まったくない」と回答した人の割合がわずかに高くなる。困窮度Ⅰ群では、「まったくない」が2%、「ほとんどない」が3.1%である。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）（子ども票 問 10⑤）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

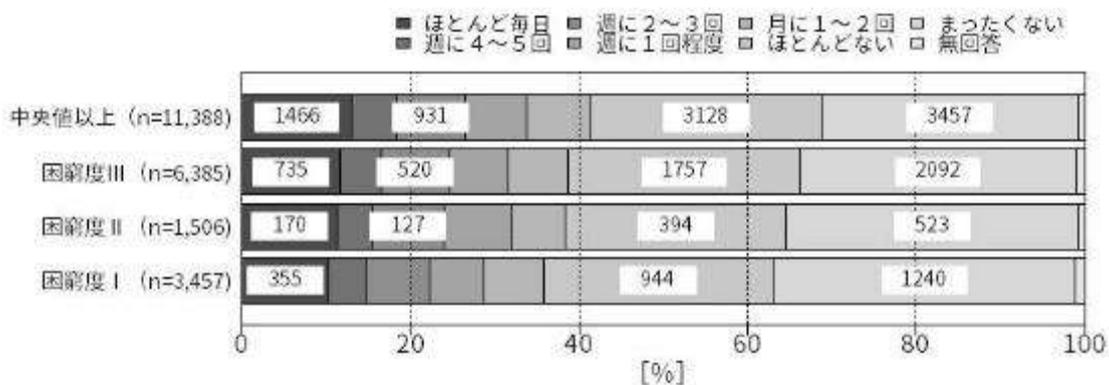
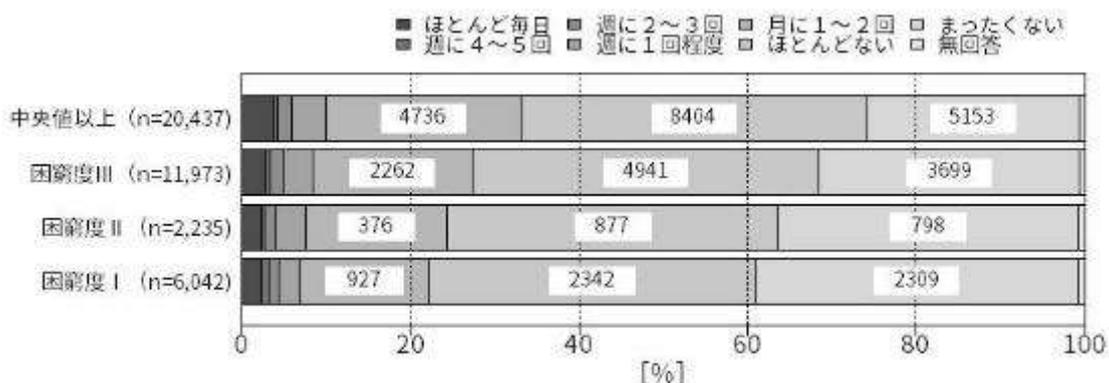


図 208. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人に宿題をみてもらうか）を見ると、困窮度が高まるにつれ、「まったくない」と回答した人の割合が高くなる。困窮度Ⅰ群では、「まったくない」が 35.9%、「ほとんどない」が 27.3%である。

困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）（子ども票 問 10㉑）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

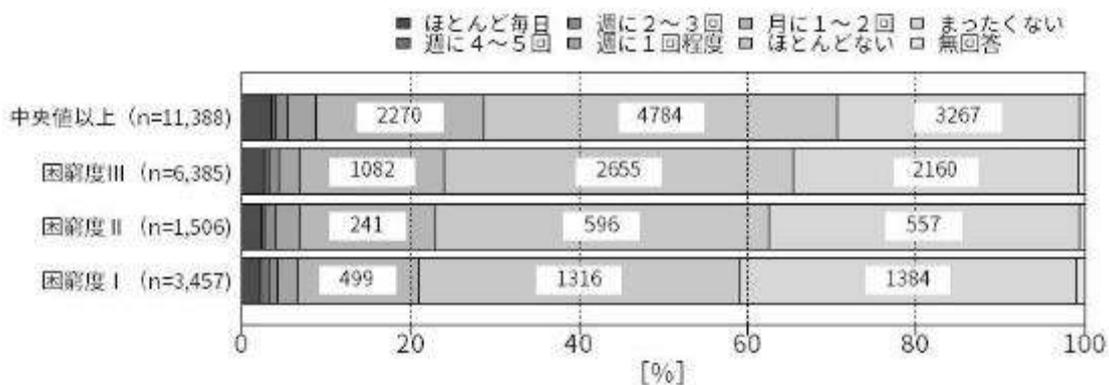
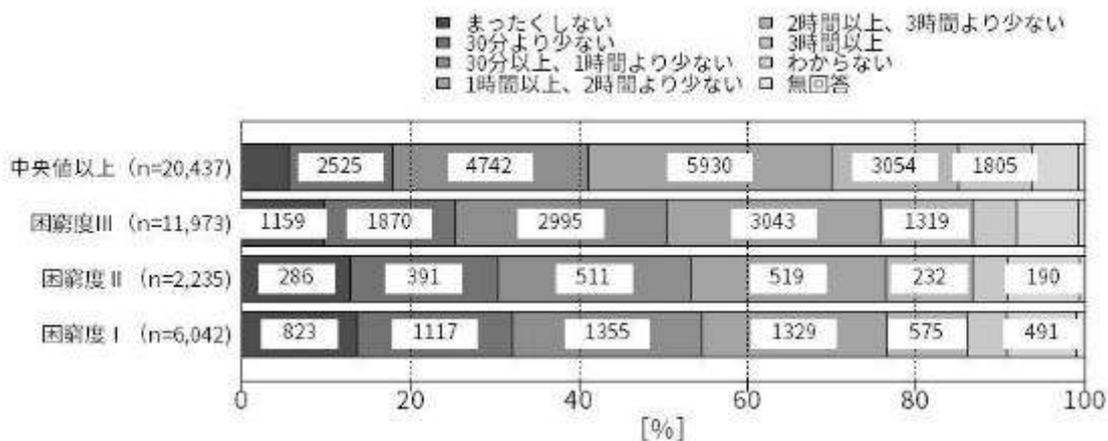


図 209. 困窮度別に見た、保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）

困窮度別に保護者と子どもの関わり（おうちの大人と文化活動をするか）を見ると、困窮度が高まるにつれ、「ほとんどない」・「まったくない」と回答した人の割合が高くなる。困窮度Ⅰ群では、「ほとんどない」と回答した人は38.1%、「まったくない」と回答した人が40%である。

困窮度別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票 問 14）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

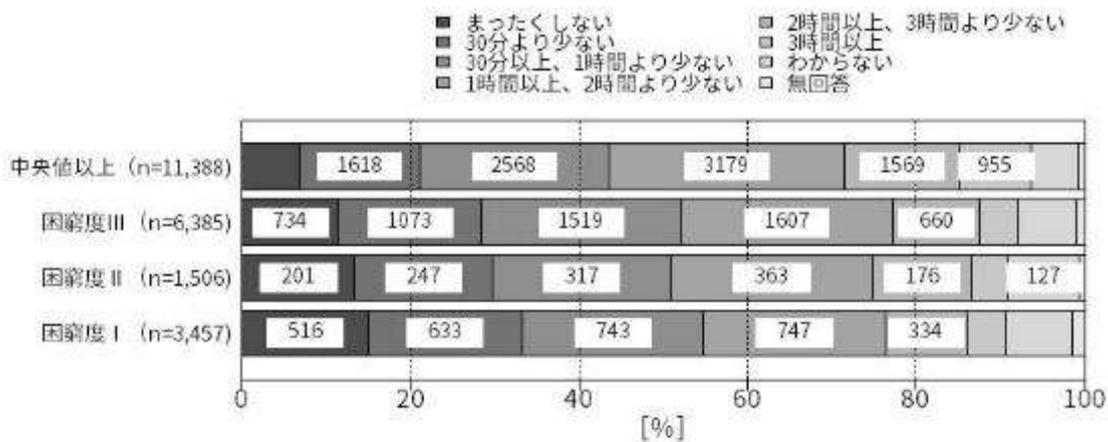
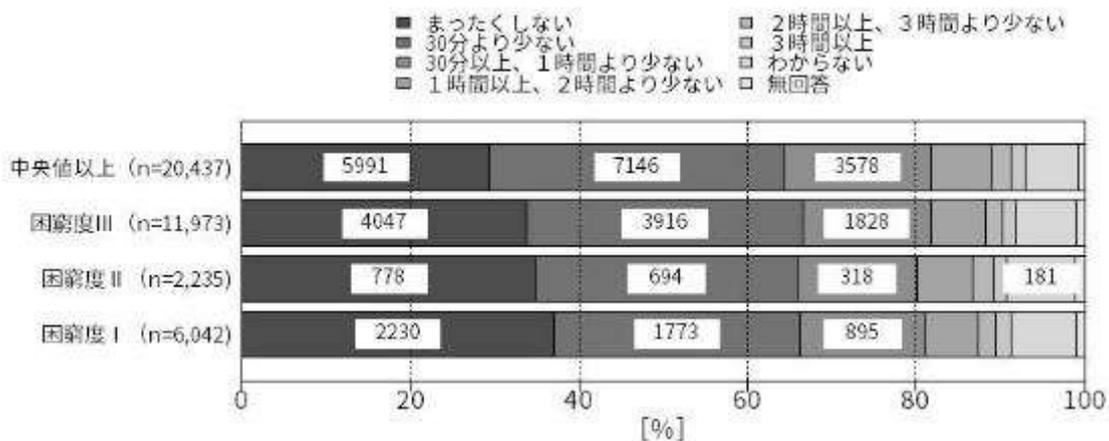


図 210. 困窮度別に見た、授業以外の勉強時間

困窮度別の授業以外の勉強時間を見ると、困窮度が高まるにつれ、「まったくしない」・「30分より少ない」と回答した人の割合が高くなっている。困窮度Ⅰ群では、「まったくしない」と回答した人は14.9%である。

困窮度別に見た、授業以外の読書時間（子ども票 問 19）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

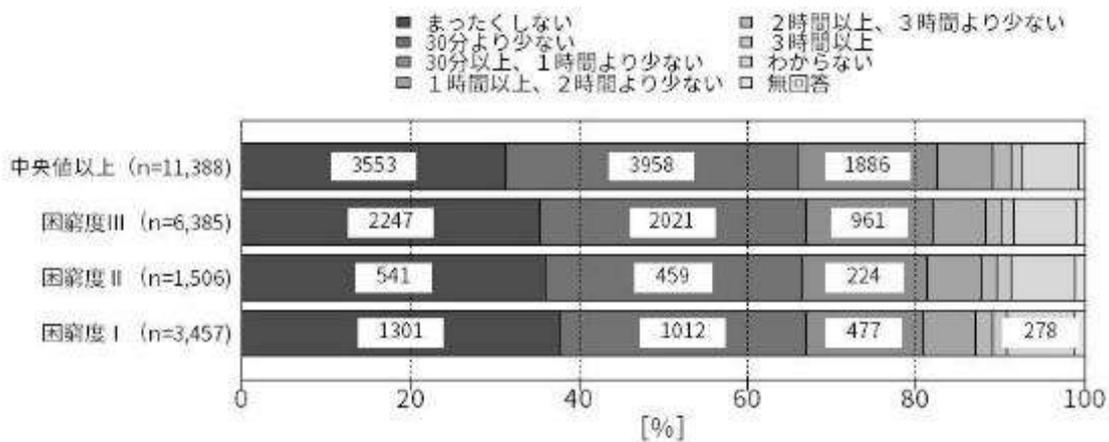
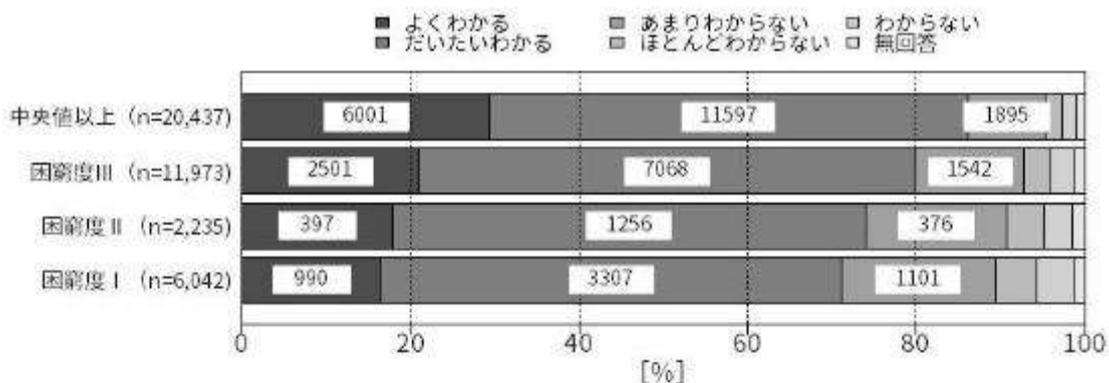


図 211. 困窮度別に見た、授業以外の読書時間

困窮度別の読書以外の勉強時間を見ると、困窮度が高まるにつれ、「まったくしない」と回答した人の割合が高くなっている。困窮度Ⅰ群では、「まったくしない」と回答した人は37.6%である。

困窮度別に見た、学習理解度（子ども票 問 18）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

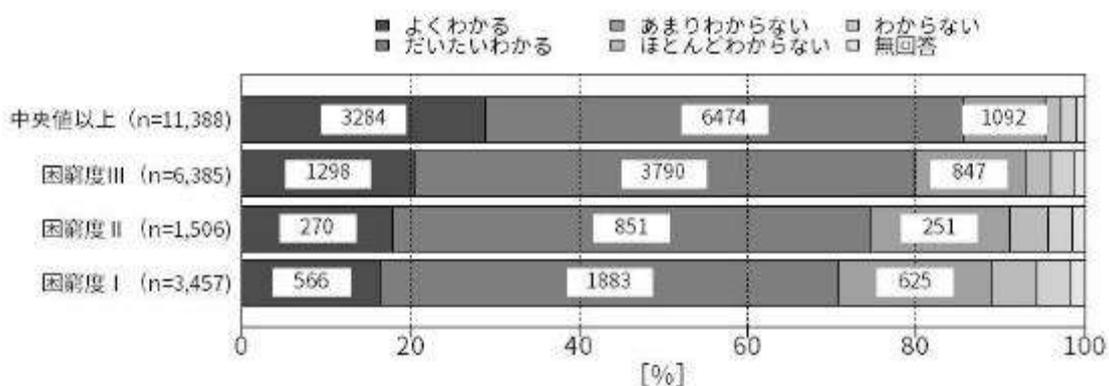
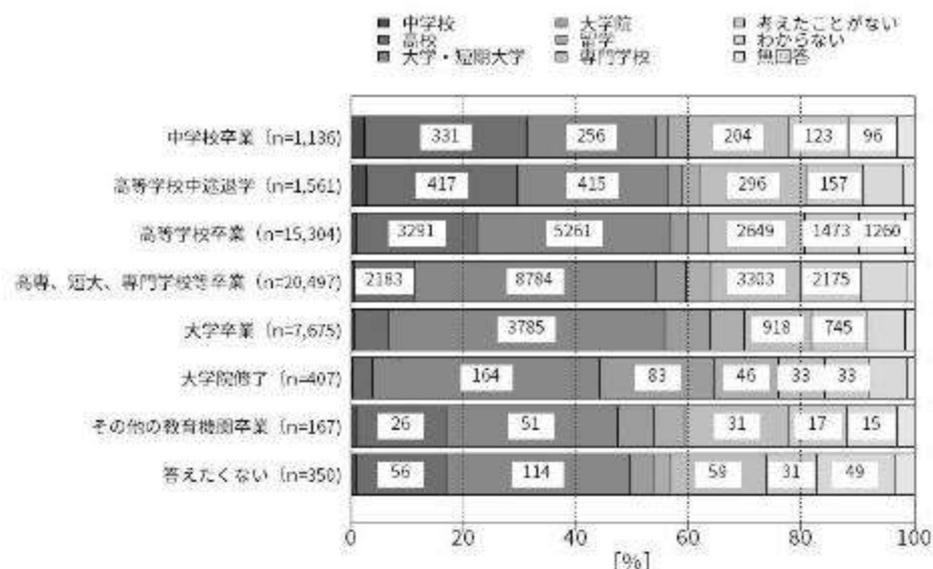


図 212. 困窮度別に見た、学習理解度

困窮度別の学習理解度を見ると、困窮度が高まるにつれ、「ほとんどわからない」と回答した人の割合が高くなっている。困窮度Ⅰ群では、「ほとんどわからない」と回答した人は 5.3%である。中央値以上群とそれ以外で「よくわかる」という回答の割合に差が見られ、中央値以上群では 28.8%である。

母親の最終学歴別に見た、希望する進学先（保護者票 問8×子ども票 問27）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

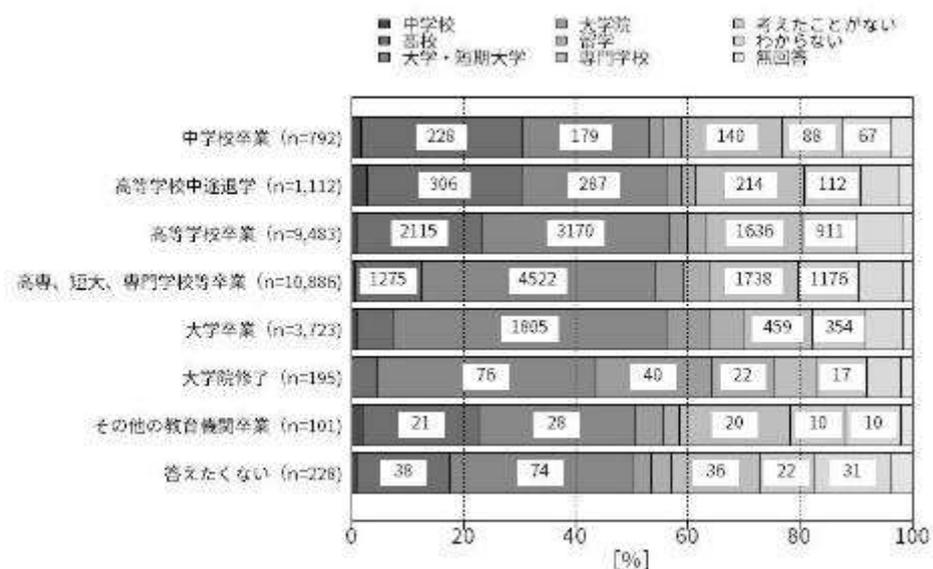
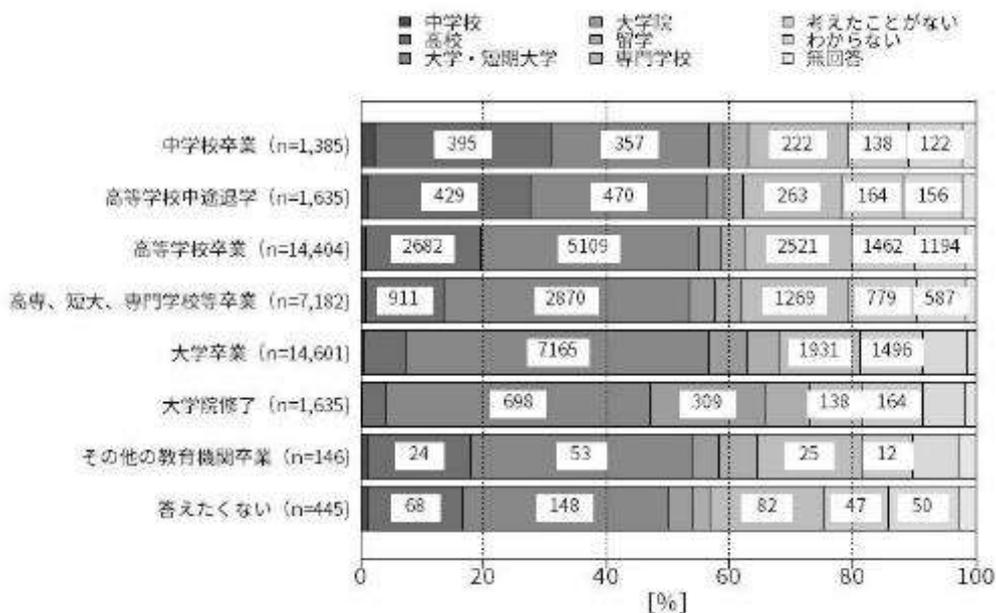


図 213. 母親の最終学歴別に見た、希望する進学先

母親の最終学歴別に子どもの希望する進学先を見ると、母親が中卒または高校中退者では、「中学校」または「高校」までと回答した子どもの割合が高くなっている。母親が大学卒業では「大学・短期大学」と回答した割合が高く、48.5%である。

父親の最終学歴別に見た、希望する進学先（保護者票 問8×子ども票 問27）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

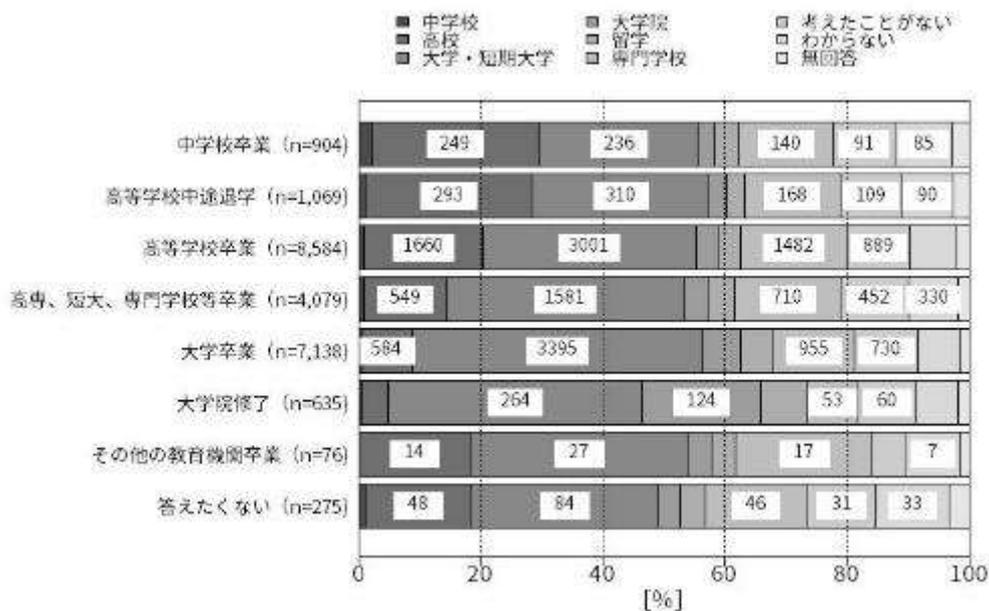


図 214. 父親の最終学歴別に見た、希望する進学先

父親の最終学歴別に子どもの希望する進学先を見ると、父親が中卒または高校中退者では、「中学校」または「高校」までと回答した子どもの割合が高くなっている。父親が大学卒業では「大学・短期大学」と回答した割合が高く、47.6%である。

困窮度別に見た、塾代助成カードの所持状況（保護者票 問 18） ※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

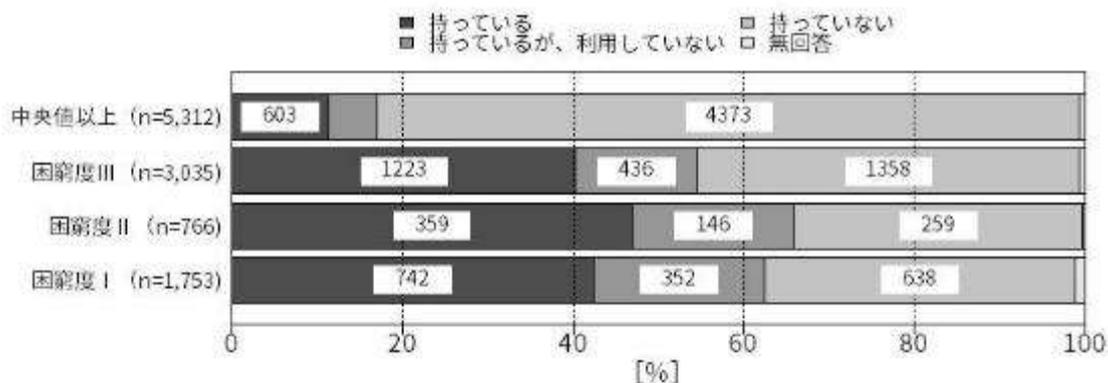


図 215. 困窮度別に見た、塾代助成カードの所持状況

困窮度Ⅰ群では、塾代助成カードを「持っている」が42.3%であるのに対し、困窮度Ⅱ群では46.9%、困窮度Ⅲ群では40.3%、中央値以上群では11.4%である。中央値以上群では、「持っていない」が最も多く、82.3%であった。

困窮度別に見た、学習塾等の利用状況（子ども票 問 15） ※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

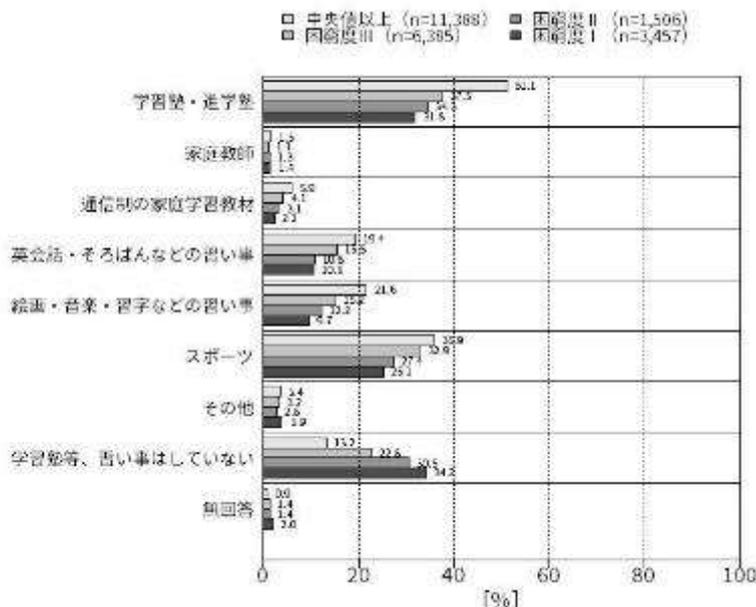


図 216. 困窮度別に見た、学習塾等の利用状況

困窮度Ⅰ群では、「学習塾・進学塾」に通っていると回答した割合が31.8%であるのに対し、困窮度Ⅱ群では34.3%、困窮度Ⅲ群では37.5%、中央値以上群では51.1%と約半数に上っている。「英会話・そろばんなどの習い事」、「絵画・音楽・習字などの習い事」、「スポーツ」についても、困窮度が高まるほど割合が少なくなっている。

塾代助成カードの所持状況別に見た、通学状況（保護者票 問 18×保護者票 問 21）
 ※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

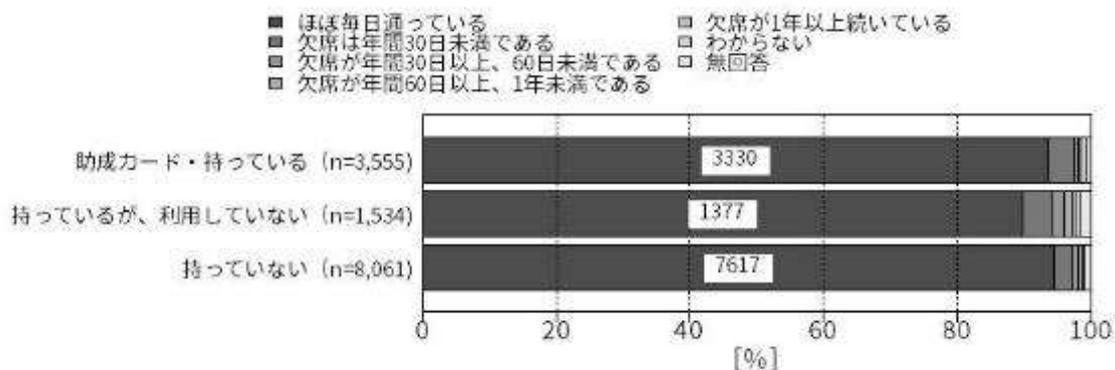


図 217. 塾代助成カードの所持状況別に見た、通学状況

塾代助成カードを持っていない人は、子どもが学校に「ほぼ毎日通っている」と回答した割合が 94.5% であるのに対し、持っているが利用していない人が 89.8%、持っている人が 93.7%である。

学習塾等の利用状況別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票 問 15×子ども票 問 14）
 ※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

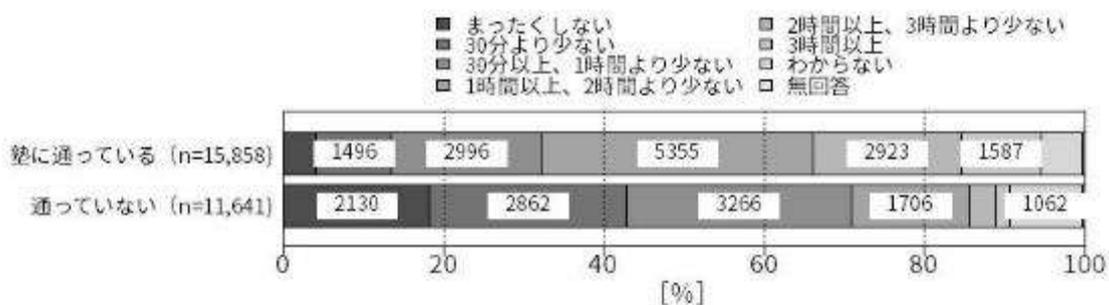


図 218. 学習塾等の利用状況別に見た、授業以外の勉強時間

勉強を中心とした塾に通っていない人は、授業時間以外に勉強を「まったくしない」が 18.3%であるのに対し、塾に通っている人では 4.1%である。

学習塾等の利用状況別に見た、学習理解度（子ども票 問 15×子ども票 問 18）

※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>



図 219. 学習塾等の利用状況別に見た、学習理解度

勉強を中心とした塾に通っていない人は、学校の勉強が「よくわかる」と答えた割合が 18.1%であるのに対し、塾に通っている人は 27.5%である。

学習塾等の利用状況別に見た、希望する進学先（子ども票 問 15×子ども票 問 27）

※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

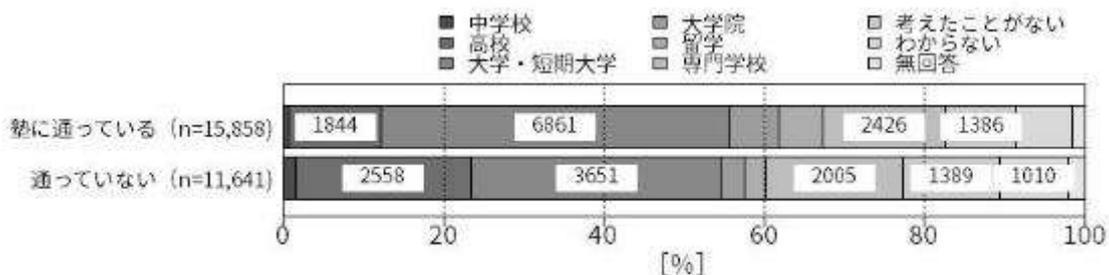


図 220. 学習塾等の利用状況別に見た、希望する進学先

勉強を中心とした塾に通っていない人は、「大学・短期大学」まで行きたいと答えた割合が 31.4%であるのに対し、塾に通っている人は 43.3%である。

塾代助成カードの所持状況別に見た、希望する進学先（保護者票 問18×保護者票 問15）
 ※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

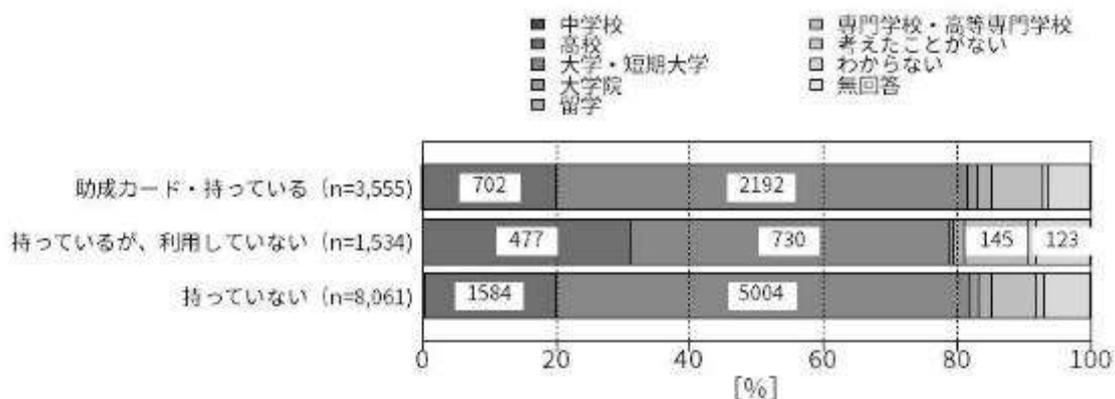


図 221. 塾代助成カードの所持状況別に見た、希望する進学先

塾代助成カードを持っていない人は、子どもの進学先について「大学・短期大学」まで希望すると回答した割合が 62.1%であるのに対し、持っているが利用していない人が 47.6%、持っている人が 61.7%である。

塾代助成カードの所持状況別に見た、子どもの進学達成予測（保護者票 問18×保護者票 問16）
 ※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

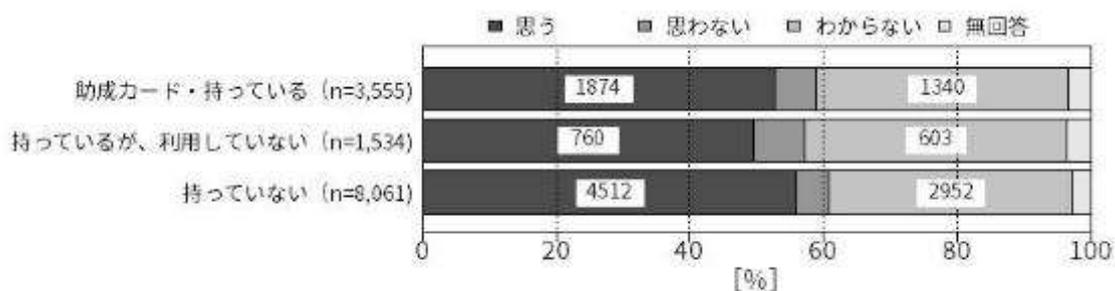


図 222. 塾代助成カードの所持状況別に見た、子どもの進学達成予測

塾代助成カードを持っていない人は、子どもが希望どおりの学校まで進むと思うと回答した割合が 56%であるのに対し、持っているが利用していない人が 49.5%、持っている人が 52.7%である。

塾代助成カードの所持状況別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）（保護者票 問 18×保護者票 問 14(4)）

※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

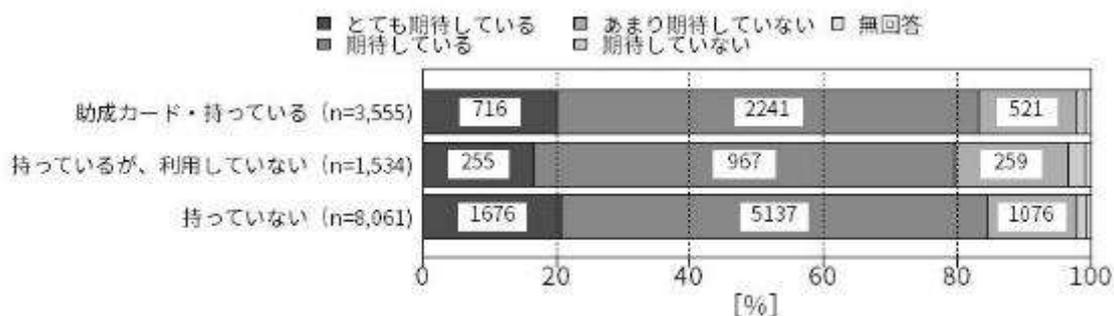


図 223. 塾代助成カードの所持状況別に見た、保護者と子どもの関わり（子どもへの将来の期待）

塾助成カードを持っていない人は、子どもの将来を「とても期待している」と回答した割合が 20.8% であるのに対し、持っているが利用していない人が 16.6%、持っている人が 20.1%である。

学習塾等の利用状況別に見た、子どものセルフ・エフィカシー
（子ども票 問 15×子ども票 問 26 (1)～(6)）

※大阪市独自項目

※子どもの自己効力感（セルフ・エフィカシー）については図 148 上の説明参照。

<大阪市 24 区>

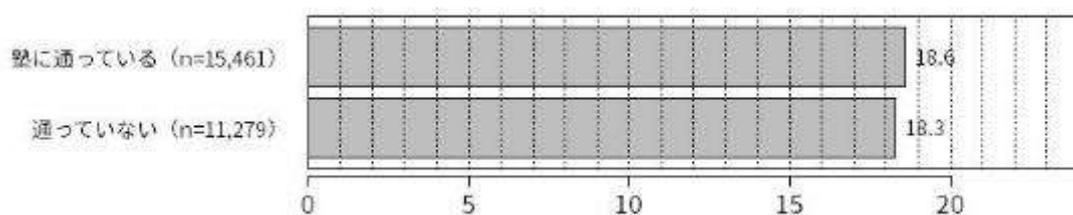


図 224. 学習塾等の利用状況別に見た、子どものセルフ・エフィカシー

勉強を中心とした塾に通っていない人は、自己効力感（セルフ・エフィカシー）の平均点が 18.3 点であるのに対し、塾に通っている人は 18.6 点と、大きな差は見られなかった。

経済的な理由で学習塾に通わすことができなかったかどうかと、塾代助成カードを持っていない理由
 (保護者票 問 13 の 9×保護者票 問 20)

※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

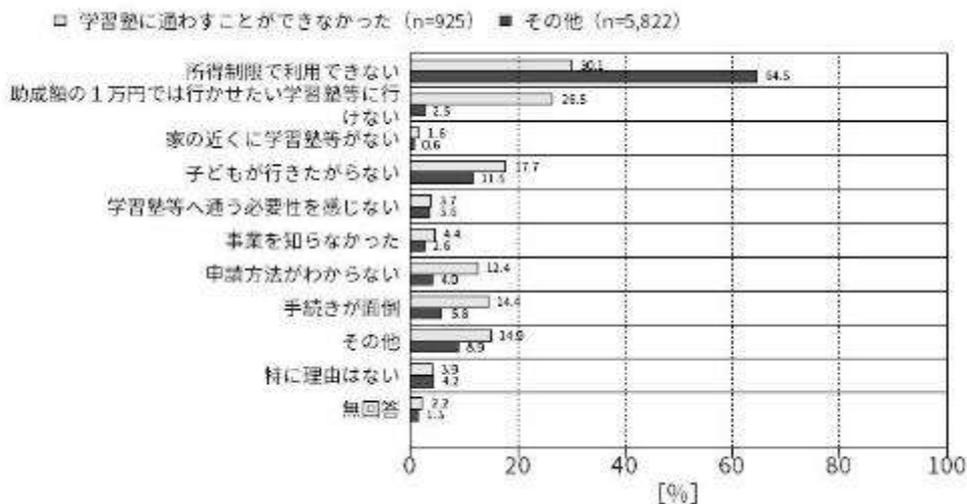


図 225. 経済的な理由で学習塾に通わすことができなかったかどうかと、塾代助成カードを持っていない理由

塾へ通わせられなかった人は、「所得制限で利用できない」という理由で塾代助成カードを持っていない人が 30.1%と最も多かった。また、「助成額の1万円では行かせたい学習塾等に行けない」は差が大きく、通わすことができなかった人はそうでない人の 10.6 倍となっている。同時に、「申請方法がわからない」(12.4%)、「事業を知らなかった」(4.4%) も見過ごすことができない。

経済的な理由で学習塾に通わすことができなかったかどうかと、学習塾等に通っていない理由 (保護者票 問 13 の 9×子ども票 問 17)

※大阪市独自項目

<大阪市 24 区>

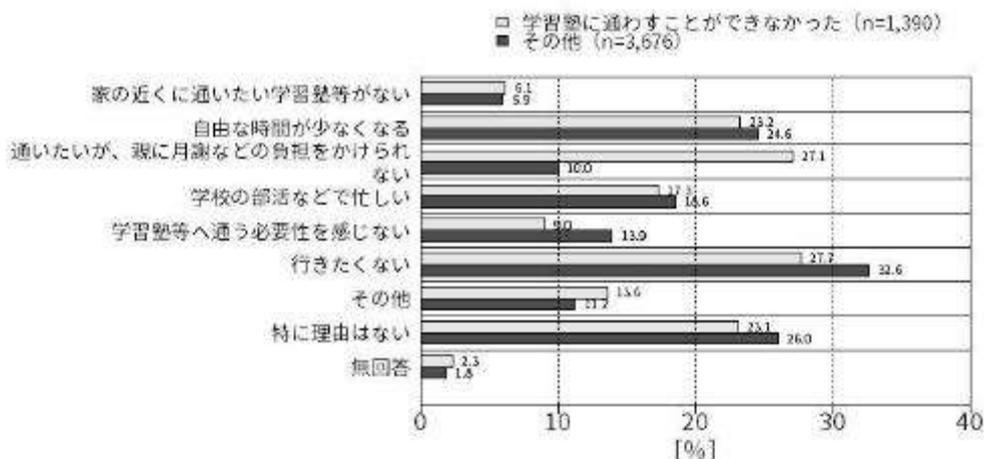
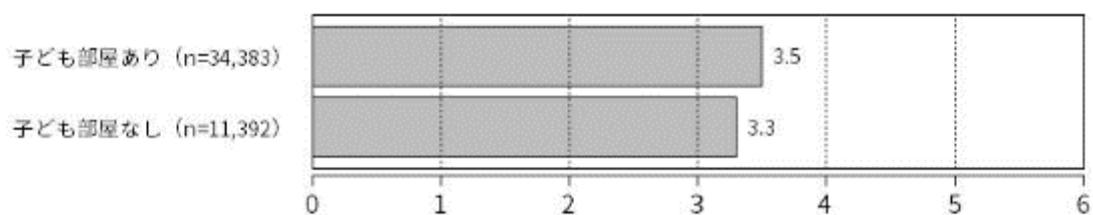


図 226. 経済的な理由で学習塾に通わすことができなかったかどうかと、学習塾等に通っていない理由
 塾へ通わせられなかった人は、子どもが「通いたい、親に月謝などの負担をかけられない」と回答した割合が 27.1 と高く、そうでない人の 2.7 倍に上っていた。

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

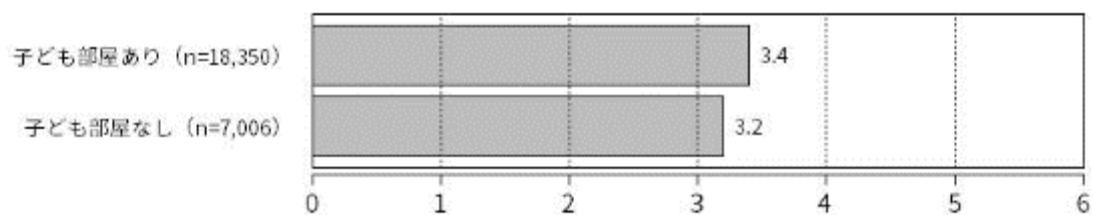
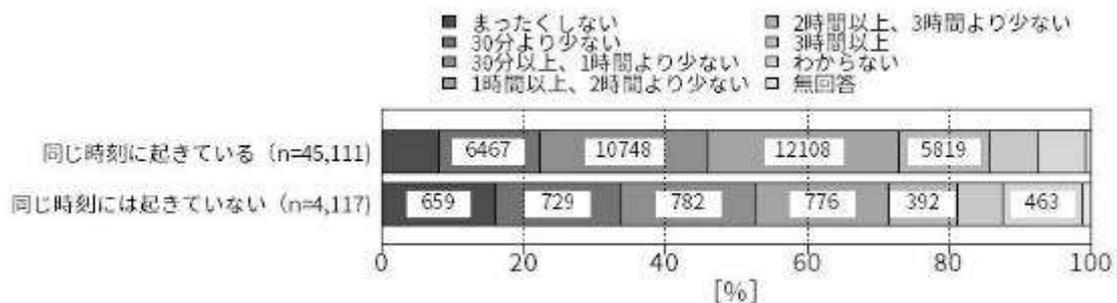


図 227. 子ども部屋の有無別に見た、勉強時間の平均値

子ども部屋がある子どもの方が、勉強時間が長い傾向にあった。

起床時間の規則性別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票 問2×子ども票 問14）

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

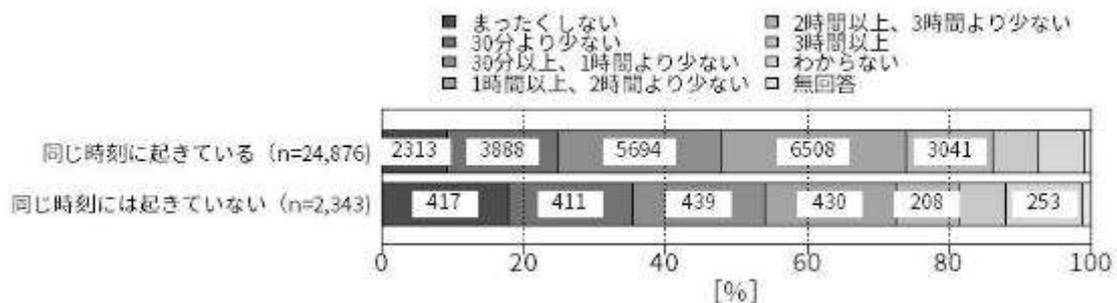


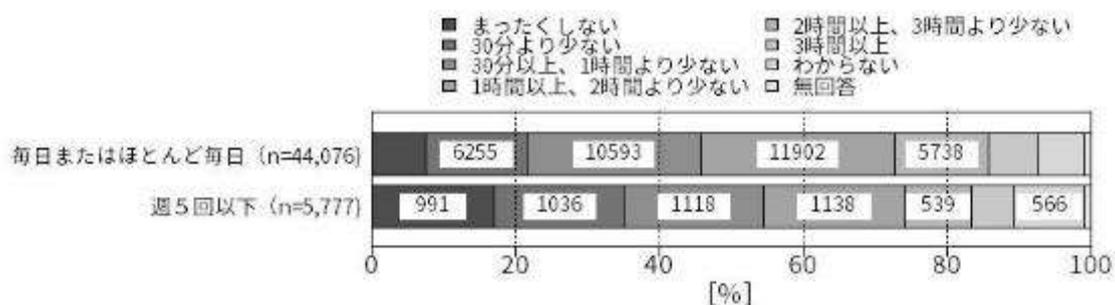
図 228. 起床時間の規則性別に見た、授業以外の勉強時間

ここでは、子ども票問2において「起きている」「どちらかと言えば、起きている」と回答した子どもを「同じ時刻に起きている」、「あまり、起きていない」「起きていない」と回答した子どもを「同じ時刻には起きていない」としている。

起床時間の規則性別に授業以外の勉強時間を見ると、「同じ時刻に起きている」子どもの方が、「30分以上、1時間より少ない」、「1時間以上、2時間より少ない」、「2時間以上、3時間より少ない」と回答した人の割合が高い。「同じ時刻には起きていない」子どもでは、「まったくしない」と回答した人は17.8%となっている。

朝食の頻度別に見た、授業以外の勉強時間（子ども票 問 5(1)×子ども票 問 14)

<大阪府内全自治体>



<大阪市 24 区>

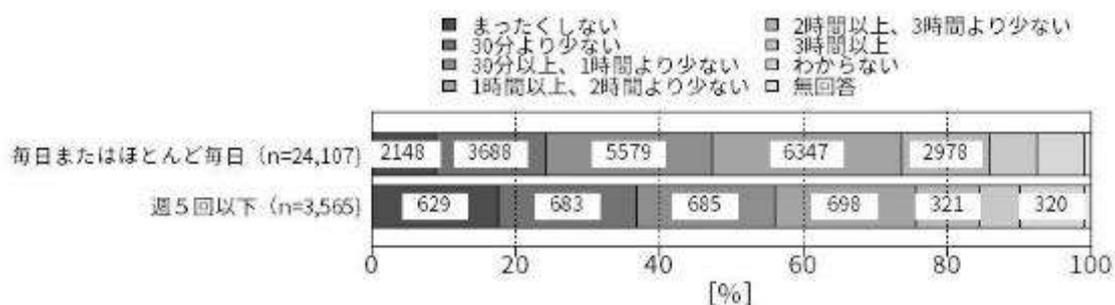


図 229. 朝食の頻度別に見た、授業以外の勉強時間

ここでは、子ども票問 5 において「毎日またはほとんど毎日」と回答した子どもを「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる、それ以外を選択した子ども（無回答除く）を「週 5 回以下」としている。

朝食の頻度別に授業以外の勉強時間を見ると、「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる子どもでは、「まったくしない」と回答したのは 15.3%であり「週 5 回以下」の子どもよりも少ない。また、同じく「毎日またはほとんど毎日」朝食をとる子どもでは、「30 分以上、1 時間より少ない」「1 時間以上、2 時間より少ない」「2 時間以上、3 時間より少ない」と回答した子どもはそれぞれ 23.1%、26.3%、12.4%であり、「週 5 回以下」朝食をとる子どもよりも割合が高い。